

みちしるべ文庫 七

仕え合つて辛い

松下昌義

みちしるべ

目次

一、	念が自分を造る	三	一、	生き甲斐	三一
一、	特別な時をもつ	五	一、	仕え合う幸い	三三
一、	自分の魂を養う	七	一、	言葉を越えてそのままを見る	三五
一、	愛は人の徳を高める	九	一、	動く者から生きる者へ	三七
一、	すべては道具	一一	一、	聖書の言葉	三九
一、	善き人々の中に自分を置く	一三	一、	喜びと楽しみ	四一
一、	自分を大切にあつかう	一五	一、	不和を越える	四三
一、	神のご意志を知る	一七	一、	素晴らしい自分に気づく	四五
一、	神に近づきなさい	一九	一、	神さまの定めに気づく	四七
一、	思いを清める	二一	一、	自分の心を善きことで満たす	四九
一、	心の支えを持つ	二三	一、	あとがき	五三
一、	自分の「分」	二五			
一、	神の御旨	二七			
一、	あなたはどうかのだ	二九			

みちしるべ

あなたの心があるところに あなたの宝もある

— 聖書 —

念おもいが自分を造るつく

松下昌義

私達は、自分の外側に現れたものには、とても気をつかいますが、内側には、さほど気をつかいません。

例えば、人々によく見えるところは美しく整えますが、見えないところはいい加減にしておきます。なにかの都合で、見えないところが人々の目にさらされてしまいますと、恥はずかしさで慌あわてふためく、ということになります。

私達にとって見えないところの一つは、私たちの思いです。思いというものは、それを言葉や表情などに出さないかぎり、誰にも分かりません。

ですから、思うだけで他人さまに分からなければよい、と考えてしまいます。はたして、それでよいのでしょうか。

私達は、思いということを、内容が何も無いもの、と考えています。ですから、「ただ、思うだけなのだから、いいのじゃない」と言うことで、

さまざまな恐ろしいことを思いますし。思いとは正反対の言葉を平気で語ったりします。

しかし、思いは、内容の無いことではありませぬ。思いはそれ自身大きな力の固かたまりなのです。

私達は、いつもいつも何かを思っている者です。そして、その思いによって、自分を動かしているのです。

例えば、理屈りくつではよく分かってても、自分の思いが変わると、理屈で立てたものは一瞬にして吹っ飛び、簡単に変えられてしまいます。このように思いとは、自分を振り回す大きな力なのであります。私達の内にある思いは、刻々と動き移り変わります。ですから、思いは「今」に動く「心」です。ですから、思いを「今」の「心」という意味で、「念」という漢字で表現することにします。

念おもいとは私達を動かしている力ですが、それは同時に、自分の周囲にいる人やものにも大きな影響を与える力でもあるのです。

例えば、優しい念おもいを内に働かせている人の側に行きますと、優しい念おもいをその人から受けます。それは、その人の内にある優しい念おもいの力が、外側に出て来て、周囲の人やものに放出されるからです。

それを、私達はその人の雰囲気として感じ受けとるのです。

このように、私達の内にある念は、力なのだということをしっかりと知っておきましょう。そして、力とは、影響力を与えるものであり、必ず私達の目にはっきりと見える出来事となり、その結果を具体的に生み出すことになるのです。

イエスさまは弟子たちを、人々の中へ遣わすとき、大切な心得の一つとして、次のように言われました。

その家に入ったら、『平安があるように』と挨拶を
しなさい。家の人々がそれを受けるにふさわしけれ
ば、あなたがたの願う平安は彼らに与えられる。も
し、ふさわしくなければ、その平安はあなたがたに
返って来る。

—マタイ福音書十章十三節—

神さまの『平安があるように』と、どの家に入っても
の人に会っても祈り願いなさい。とイエスさまはおっしゃ
います。心からそのように念なさい、と言われるのです。

なぜでしょうか。それは、儀礼的にそのようにせよ、と言
うのではないのです。そのように念うことが、そのような相
手や自分自身を造ることになるからです。

ここで、イエスさまは不思議なことを言っておられます。

もし（相手が、受けるに）ふさわしくなければ、そ
の平安はあなたがたに返って来る。

自分が投げかけた自分の念が、自分自身のもとへ返って来
ると言われるのです。

自分の内に働く念は、自分の周囲の人やものに影響を与え
るだけでなく、自分自身にも影響を与える力であると、先に
言いましたが、さらに加えて、自分自身から出て行った念も
相手がそれを拒絶して受け入れなければ、そっくりそのまま
自分自身に返って来て、自分のものとなるのです。

私達は、自分の内に抱く念にもう一度注意を向けたいと思
います。どのような形であれ、悪い念を自分の内に持つとき
その念は、自分自身をそのように造りあげる力となるのです。
ですから聖書は「いつも喜んでいなさい」「絶えず祈りなさい」
「すべての事について感謝しなさい」と示しているのです。
自分の生活を明るく幸福なものにする一番の近道は、自分
自身の内なる念をよく見守ることです。

善い念はよく自分を造り、悪い念は悪い自分を造ります。人
を根み、憎む念を持つ者は、自分自身を傷つけることになりま
す。しかし、人を愛し、人の幸いを願う念を持つ者は、自分自
身を明るく幸いにする力をその念によって受けるでしょう。

みちしるべ

戸を開けて祈りなさい — 聖書 —

特別な時をもつ

松下昌義

自分を、誰にも遠慮することなく、思い切り出せば、気分がとても安らぐでしょう。しかし、毎日の私達の生活は、自分を押さえ、押さえ生きています。

私達を押さえつけているものはさまざまです。

例えば、暑さ寒さといった自然の環境によるものがあります。また、戦争や政治や経済の不安定な出来事や考え方の変化についていけなくなる、社会的文化的な状況によるものもあります。また、家庭や学校における自分の立場の変化、つまり転居するとか、転校するとか、退職するとかいうことも、自分を押さえつける条件になるでしょう。さらに、夫婦、親子、姪や姑との関係、友達とか上司や部下との関係においても、私達は自分自身を押さえつけています。加えて、過労とか睡眠不足とか病気などの身体的な条件も、自分を押さえつけているものです。

とにかく、私達はさまざまな事柄と状況によつ

て、自分を押さえつけているのです。

このような状況から、全く解き放たれて、自分を思い切り出せたなら、どんなに爽快な自分になることでしょう。しかし、誰も簡単にそのようなになれるものではありません。が、諦めることはありません。その気になれば、誰でも出来るのです。

自分を押さえつけているものから解放されて、本当の自分になるとき、今まで見たり、感じたりしていた世界とは違う、もうひとつの世界が自分に見えてくるようになります。

それは、小さな部屋の中に閉じ込められていた自分を、外側の果てしない世界に向かって開かれた自分にするのと同じです。

それでは、そのような自分にするためにどのようになればよいでしょうか。

大切な一つは、一日のうちに、少しの時間でもよいですから、特別な時間を自分にもてるようにすることです。特別の時間とは、日常のさまざまな事柄や思いに、考えや感情が次々と振り回されてしまっている自分とは、違った自分の時間を持つことです。

くわしく言いますと、私達が経験するさまざま

な喜び、悲しみ、怒り、心配、そしていろいろな経験や行いなどを、確りとつかまえて、それを、あたかも他人の出来事を見るような気持ちで、突き放して眺めるのです。

私達は、誰かが語ったり、行ったりしている姿は、その良い点も悪い点も、ハッキリと見ることが出来ます。しかし、自分の言葉や言い方、さらに行っている姿はよく見えません。それは、語っている言葉の中に自分が居り、行っている行いの中に自分が居るからです。見る目自身が、自分の目を直接見ることが出来ないのと同じです。なぜなら、見ている目は見ている目自身の中にいるからです。

とにかく、自分をよく見るためには、自分を突き放して、他人を眺めるように見ることです。

先に申しました、特別な時間を自分のために持つということは、自分の行動や経験を、自分自身のそれではなく誰か他人のそれであるように突き放して見る時を持つということです。

そのような時を持ちつづけることによって、今までの自分とは違った、落ち着いた自分が自分の内に生まれて来ます。例えば、すぐに癩癩をおこして、感情的な行動をする人が、自分の感情に支配されなくなり、不安な出来事に対して、落ち着いてその不安を見据えることが出来る自分になっていきます。そして、怒っても喜んでも悲しんでも、心底からそう

ではなく、冷静で笑っているようになります。その時、今までの自分とは違った自分自身であることに気づくでしょう。

自分を押さえつけるような出来事から私達は逃れることはできません。しかし、押さえつけるそれらを支配する者となることはできません。このような生き方を、使徒パウロは次のように言いました。

わたしは、肉において歩んでいるが、肉に従って闘うものではありません。

—コリント第二の手紙十章三節—

死にかかっているようで、生きており、悲しんでいるようで、常に喜び、物乞いのようで、多くの人を富ませ、無一物のようで、すべてのものを所有しています。

—六章九節—

外なる人は衰えて行くとしても、内なる人は日々新たにされていきます。

—四章十六節—

彼は自分を解放しています。その秘密は、自分を神さまの手の中に置いて、そこで安心を得て、そこから他人を見るように自分を見つめつつ生きていくところにあります。

神に自分の身をあずけて、そこから自分を見る見方を、毎日の生活のなかに特別な時を持つことによって頂こう。

みちるベライト

人は自分のまいたものを刈ることになる

— 聖書 —

自分の魂を養う

松下昌義

その人の心の持ち方が卑しければ、外面をどれほど美しく着飾っても、やはりその人の卑しさは外面に出てきます。

ちょっと見の美人があり、ちょっと見の紳士がいます。しかしそれは、ちょっと見ただけで、次の瞬間に卑しさを感じて、逃げ出したくなるものです。

外面のかけよさに惹かれて、好きになり、好きになると、夢中になってしまい、相手の卑しさが見えなくなり、結婚してからその卑しさに気づいて、いろいろ悩み、あげくのはては憎しみいっぱい離婚してしまうというような人がたくさんいらっしやいます。

どの人にも人柄ひとがらがあり、品格、品性というものがあります。卑しい人とは、人柄が卑しいということであり、品格、品性が卑しいということでありましょう。

人の品格はその人の学歴や社会的な肩書かたがき、また経済力とは関係ありません。

人の品格はその人の内面の世界、こころの持ち

よう、思いの在り方、どのような事柄に自分の考えを向けて生活をしているかによって、自分の内に造られ備えられて行く品性であります。

人間の品性は、その人の生まれ育った家庭と両親の人柄の感化かんかによってその基礎が培われつちかれます。そして、その後、その人が何に自分の思いを向けて生きようとするかという志こころざしの持ち方によって、品格はその人の身につくものです。そして、なによりも大切なことは、その人がどのような人から自分の人生の師として尊敬を抱くかによつて、その人の品格は決定されます。

今日、私達が生きている社会的状況は、肉体的な感覚を一時的に楽しませてくれることにおいてはとても都合のよい社会です。しかし、人間の心を品性豊かに養い育てるには、最も悪い社会だともいえます。

私達の品性を豊かに養い育てることとまったく関係のない学歴や社会的地位、経済的に富むことの方に人々が最大の関心を寄せている社会が今日の社会です。

大きな家に住み、美味しい物をたらふく食べ、贅沢ぜいたくなものを身に着け、高級車に乗りまわし、情欲を欲しいままに満たし遊ぶことを願ひ、そのようになることをよい生活だと思ひ、そのように願

って働いているのが、今日の私達の社会的風潮です。このよ
うな社会的風潮のなかに生きる人間の品性は、ますます卑し
くなるばかりです。

品性の卑しさは、その人の内面の卑しさであり、心と思
いの卑しさであります。それは、真実なるものに対する願
いのかけた魂の姿でもあります。

真実なるものに対する願いの欠如は、正しいもの、本当に
美しいもの、深い愛情についての感覚を失わしめます。そ
ういう人は、何を見ても、何を聞いても、またどこへ行つても
それらに秘められている、自分の魂に訴えかけて来る真実を
受けとることが出来ません。そのような人は、いつも自分の
表面感覚だけで物に関わっており、軽薄な感じ方しか出来ま
せん。その結果、自分自身の魂を養うことが出来ず、ただ空
しく生きて来た人生の結果を背負って、暗黒の世界に落ちて
行くことになりましょう。

自分の内面に豊かな品性を持つと言うことは、生活のすべ
ての中に、喜びと感謝の思いを持てるようになるということ
であります。そのような思いを自分の内に養うためには、自
分の感情を豊かにすることです。その為には、出来るだけ善
いもの、美しいもの、に関わるように努力することです。

美しいものを見た喜び、愛情ゆたかなものに対する尊敬、
損得を越えたものに対する敬意、最も聖なるもの、即ち神に
対する畏敬、このような感情を自分がもてるようなものに関

わるなら、私達の内なる魂は、どんどん成長して行きます。
その結果、ものを見る感覚が豊かで鋭くなり、そのものに秘
められている今まで見えなかった永遠で神秘なる世界がわか
るようになって来るのです。そのとき、喜びと平安と希望と
力とかが自分の内に漲ってくるのを感じることでしよう。
しかし、不平不満、愚痴と文句、批判と攻撃ばかりしてい
る者は、ますます卑しい感情を増し、すべての物事からただ
暗いことばかりを引っ張りだす卑しい人になり果ててしま
うでしょう。

ものが見えない人々、まず、杯の内側をきれいに
せよ。そうすれば、外側もきれいになる。
貴方たち偽善者はわざわいだ。白く塗った墓に似
ている。外側は美しく見えるが、内側は死者の骨
やあらゆる汚れで満ちている。

— マタイ二三章二七節 —

内から、つまり人間の心から、悪い思いが出て来
る。みだらな行い、盗み、殺意、姦淫、貪欲、悪
意、詐欺、好色、悪口、傲慢、無分別など、これ
らの悪はみな人の内から出て来て人を汚すのであ
る。

— マルコ七章二一節 —



みちしるべ

愛はすべての罪をおおう

— 聖書 —

愛は人の徳を高める

松下昌義

知識をどれほど自分の身に蓄えても、自分の人格を高貴なものにすることはできません。

知識は人を誇らせ、愛は人の徳を高める

— 第一、コリント八、一 —

と聖書は教えますがこの言葉は、だれもが自分の内にしっかりと留めておくことが大切です。

私達を取り巻く社会的な状況は、人の徳を高める愛ではなく、ただの知識の洪水と氾濫であるようにおもいます。日進月歩の科学技術に人々は追われ、追いつくことに懸命の毎日です。

私達の国は、高度な技術を持って経済的に富んできましたが、その結果が同時に、私達の徳を高めることに繋がっているとはいえません。

知識を持ちそれを使って、様々な便利で生産的なものを生み出すことは良いことです。しかし、間違っってはならないことは、知識を自分につ

けることが自分の徳を高めることにはならないという事です。このところについて、私達は正しい認識をもっていないようです。

例えば、知識を沢山持っている人が、なにかの不祥事を起こすと、

「あのような賢い人が、どうしてそのようなことをしてしまったんだろう」と

と、ありえないことが起こったように不思議がります。しかし、それは何の不思議もないことです。例え、百科事典ほどに知識を持っていても、そのこととその人の人間性とは全くなんの関係もありません。

知識は徳をその基礎に据えてこそ、それは本当に尊いものになるのです。徳を欠いた知識はただ人を誇らし高ぶらせるだけです。このようなところに、学歴社会の弊害が起って来るのではないかとおもいます。

それにしても、徳とは何なのかと申しますと、新約聖書に於いては、私達が神さまから頂いている霊的な働き、別な言葉でいいますと、私たちの霊性を確りと築き上げることをいうのです。

霊性などと言いますと、つかみどころがないものですから、すぐには理解できませんが、次のよ

うに申しますと、納得いただけるとおもいます。即ち、靈性を養い育てるのは愛だけであると。

自分の内にある靈性がゆたかに育つ食べものは、「愛」であります。ただの知識を自分に蓄えても、私達の靈性の栄養にはなりません。それどころか、誇り高ぶるといふ傲慢の思いや態度が、私達の靈性を弱め、遂には殺してしまいます。

自分だけの利益を求めて、人のことなど全く考えない利己的な態度や思いも、靈性を殺してしまいます。すぐに感情的になり怒ったり、恨んだり、憎んだり、感覺的な欲望だけを満足させることだけ求めて生きる生き方も、自分の内にある靈性を弱らせ駄目にしてしまいます。その結果、利己的現実主義の人間となり、自分の人生に高く尊い志を持たなくなり、ただ表面感覺の満足を与える物に引きずられ、振り回されて動くだけの人間となりはててしまいます。

愛は私達の内なる靈性を育てるただひとつの栄養です。愛は神さまを畏れ仰ぐことによつていただくものです。やさしさ、思いやり、真実なるものにたいする志、ゆるし、よろこび、かんしゃ、いのり、これらは愛であり、それはすべて神さまから出て来たものです。この愛こそ、私達の靈性を育てる食物となるのです。

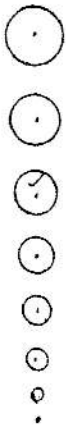
このように靈性とは、私達のだれもが神さまからいただいた、最も内深くに秘め持っているところの、言わば人間へと自分を造り上げていく真実の自分のことであるといえます。

「愛は人の徳を高める」と聖書は教えていますが、愛は、それを受ける人は勿論のこと、与える人にも共に高める働きをします。人をゆるすことは、自分がゆるされることでもあります。人に喜びを与えることは、自分に喜びを受けることでもあるのです。人に怒りを発することは、自分に向かつて怒りをなげつけることであり、自分の靈性を汚すのです。

誰でも怒った後には、自分の内に良い気分は残りません。ものごとに対して否定的、悲觀的に関わってはならないと思えます。誉めることが出来なければ、沈黙しているほうが自分の為にも人のためにもよいことです。感情が高ぶっている時に語る言葉は、その時だけで自分にも相手にも、そのころの奥には届かないものです。愛情と確信とをもって語った一言は、理屈で語る百万言の言葉より力があり、聞く人を動かします。そして、その一言はその人のところにいつまでも残りその人の靈性をゆたかにするでしょう。

いまだかつて神を見たものはいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内です。

—ヨハネ第一の手紙四章十二節—



みちるベライト

あなたの内なる光をかがやかしなさい

— 聖書 —

すべては道具どうぐ

松下昌義

この世だけで消え去るものではなく、永遠に存在しつづけるものを、私達は、この世で自分の内に持たなくては、この世で生きた値打ちがありません。

× × ×
毎日働き、食べて寝て、また起きて働く、そして子を生み育て、さまざま喜び悲しみを、その時その時に味わい、老い、そして死ぬ。これが私達の日常であり、人生の現実です。

それにしても、このような私達の人生に何の意味があるのでしょうか。

× × ×
食べるといふこと、寝るといふこと、起きるといふこと、働くといふこと、子を生むといふことををそだてるといふこと、さらに、喜び悲しみ、怒り笑い、誇りと卑下、恨み嫉み憎しみ、高慢、優越、男、女、性、欲情と狂気、争いと殺戮、破壊と建設、正義、愛、美……一体これらのことがらに、どのような意味があるのでしょうか。

× × ×
この世のどのような事柄も、それ自体では何の

意味もないのです。それらは、いつも現れては消えて行くものにしかすぎません。

× × ×
例えば、腹がへっては食物を食べ、また腹がへって食べる。働いては眠り、眠っては働き、また眠る。それらの一つひとつにはなんの意味もないのです。

× × ×
では、それらは何なのでしょう。あえて言えば、それは道具のようなものであると言えます。

× × ×
あるとき、知人の大工さんが次のような話をして下さいました。

× × ×
「変わった大工がいますよ。毎日毎日、自分の道具を磨くことに熱心で、そりゃ、びっくりするほど、どの道具もピカピカなんです。ところが、建築現場に連れて行って仕事をしてもらうと、それが皆目駄目なんですわ。まったく役にたたず、ろくに仕事ができないんですわ、困ってしまいましたよ」

× × ×
道具はそれを用いてこそ意味があるのです。道具はものを造り上げるものであって、道具自体には何の意味もありません。道具の美しさは、ものを造り出し、造り上げる作業との関わりに於いて生まれて来るものです。

それにしても、道具とは、もともと仏教上の用語で、僧が道を修め、悟りを開くために用いられる修道の具のことでした。それがやがて、仏教の世界から拡大されて、武士が用いる武器のことも道具と言われるようになり、さらに、時代が下がり、「茶の湯」に用いられる器具を道具と言ひ、そして、調度と言われていたものまでが道具とよばれるようになったようです。

道具とよばれるものが持つこのようなことは、先に私たちの日常のさまざまな出来事が、道具であることに気づくならば、それはとても大切な示唆になるとおもふのです。

すなわち、わたしたちが毎日繰り返すことがらのすべては自分自身をつくり上げる、道具であるということです。

喜ぶなら、喜ぶ自分を造るのです。感謝してすべての事を行うなら、感謝する自分を造りだすことになるのです。

しかし、怒り、嫉み、惑い、恨み憎しみながらこゝとを行ひ人と関わるなら、そのような自分を造り出すことになるのです。道具の用い方によって、自分を高める修道の具とするのか、それとも、自分を汚し、さては殺してしまう殺傷の道具とするのか、毎日繰り返される道具としての出来事をどのように用いるかは、私達にとって、用心しなければならぬことでもあります。

私達は、ひよっとすると、先にあった道具それ自体を磨いてばかりいる大工さんのようになってはいないでしょうか。

例えば、食べることにだけに注意をはらう。働くことだけに励む。ものごとを楽しむことだけに関心をよせる。それは、まさに道具だけを磨く大工さんです。それ自体なんの意味も無いのです。そうならば、結局、食べてチョン。働いてチョン。楽しんでチョン。そこからはなにも生まれず、何も残らないのです。最後に死んでチョン、すべては虚無の間に消えて無くなる。その人は生きなかつたのも同じになります。

イエスさまは、あるとき、食物を不思議な業によって、たくさん与えられました。それを知った大勢の人々が、イエスさまの後を必死で追いかけ、群がって来るのを見て次のように言われました。

あなたがたが、わたしを捜しているのは、しるしを見たいからではなく、パンを食べて満腹したからだ。朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のためにはたらきなさい。これこそ、わたしがあなたがたに与える食べ物である。

—ヨハネ第一の手紙第六章二十六節—
イエスさまは、食べ物不思議な業で与えたことを、神が人々の霊性を光り輝かす恵みの「しるし」だと言われました。私達の生活の現場には、自分を永遠の命に導く「しるし」としての「道具」が満ちていることに気づきましょう。



みちしるべ

わたしに居なさい、そうすれば、わたしも
あなたに居ます。 — キリスト —

善き人々の中に自分を置く

松 下 昌 義

だれでも、自分を善い者にしようとして願っています。そのため何をするればよいのでしょうか。いろいろな方法があるとおもいますが、すぐにできる一つの方法は、善を行う多くの人々の内に自分を置くことです。そうすると、自分でも気づかないうちに、自分が善く生きることにはげまされるものです。

この世のことにだけ目を向けている人々の中に自分を置いて、毎日毎日生活していますと、その人はまったくこの世人間になります。考えることも、思うことも、話すことも、見ることも、聞くことも、感じることも、読むことも、すべてがこの世だけのことに向かって生きる者とされてしまいます。

この世だけに目を向けると言っても、それはさ
まざまです。

例えば、自分の表面の感覚だけを満足させるこ

とに思いを向ける人たちがいます。そういう人は美味いものを食べ、一時的な楽しさや面白さを目で見、耳で聞き、肌で感じるだけの生活をします。そのような人は生きていることの価値は、楽しく面白く生きることだけだと思ひ込んでいます。そのような人には、それに相応しい遊び仲間があり、その仲間によって互いに、ますますこの世間の深みに入りこんでいくこととなります。

いま一つのこの世人間がいます。それは、自分の正義や善をふりかざして、いつもばたばたしている人達です。自分が思う善、自分が思う正義に自分が追い立てられ、引きずられて生きている人です。そのような人は時として、とても他人に対して批判的です。何時も誰かを攻撃し批判しています。自分だけが正しい者であるように思っています。そのことによって、他人が迷惑を被っていることにすこしも気づきません。そういう人も、やはりそこに自分を置くことによって、ますますそのような生き方を倍加していきます。

この世人間に対して、あの世人間もいます。さきに述べましたこの世人間は、決して自分以上のおおいなる命、つまり神とか仏とよばれるものを認めません。この世人間はこの世だけしか見ない

人たちです。それに反して、あの世人間は、この世にいながら、この世に対して責任を感じていない人達です。そのような人達は、神とか仏とか霊とか、とにかくそのような世界のことを語っている限りに於いて安心する人達です。例えば世間の良識を無視し、家庭や家族を破壊することに痛みを覚え、独善と閉鎖的なその集団に自分を置くことにより、そのような集団にだけ通じる異常な人格を身につけてしまっています。そして、そのような人は必ず、自分の内に自分達の集団に属していない人に対して、敵対意識を密かに持っています。

この世的人間は、この世の自分だけしか見ていない者です。また、あの世人間は、この世を大切にしないで、霊とか魂とかいうことばかりに思いを囚われている者です。

しかし、私達は、肉体と精神、身体と魂とを保持して生きています。言うならば、この世とあの世とを一緒に生きています。

ですから、善く生きるということは、この世とあの世とをどのように自分に結んで生きるかということです。つまり、肉体と精神とをどのように自分のうえに調和をさせて生きるかということです。また、身体と魂と霊とをどのようにして自分の生活で関わらせ、共に善く育てて行く生活をするかという事です。

私達の身の周りには、この世人間は沢山いますし、あの世

人間も此処彼処にいます。でも、この世とあの世とを自分に調和させて生きようとしている人は、まことに少ないように思うのです。

人間とは、人と人との関わりに生きるものであるという意味での人の間性、つまり人間性をもたなければなりません。同時に、天と地、神と動物との間に生きる者として人間性が必要なのです。

このような人間性はどこから生まれてくるのかといいますが、「自分は生かされている者である」という深い知恵をもつことからです。

自分は生かされている者であるという自分自身に自分が目覚める時、この世のすべての「縁」が有り難くなって来るのです。縁とは結ばれること、関わりのことです。親子の関わり、夫婦としての結びつき、友達との関わり、物事との関わり、出来事との関わり、国や民族などとの関わり、もちろん仕事との関わり、喜び悲しみ苦しみとの関わり、とにかく自分が生きている事が、すべて自分を超えた大いなる命の創造と保持と完成の中での出来事であり、従って、この世に在って自分に関わることがらのどれ一つといえども、自分の身体と魂と霊とにとって、無駄なものはないのだということです。その時、大いなる命に感謝できるようになります。

善を行う人々とは、感謝して生きる人々です。そのようなひとびとの中に自分を置くとき、あなたは自分でも気づかない内に、善く生きようにはげまされるのです。

みろしるベライト

われらは神のもの・その民、
神に養われる羊の群れ—— 聖書——

自分を大切にあらつかう

松下昌義

他人を大切にする前に、先ず、自分自身を大切に
するように心掛(こころか)げねばなりません。

このようなことを申しますと、「それは間違
いです」と言われる方があられるかも知れません。また
「そうだ、そのとおりだ」と言われる方があられるか
も知れません。

私がこのように申します理由を、これから少し
記してみようとおもいます。ご一緒に考えて下さ
れば幸いです。

自分を大切にするというのを、「他人はどの
ようになっても自分だけが利すればよいのだ」、
というような利己主義として理解していただいで
は困ります。

私は「利己主義」を勧めているものではありません。
そんな可愛(可愛)そうなく、自分自身を痛めつけ、汚(汚)す
ような可愛(可愛)そうなくをしてはなりません。とい
うことを言っているのです。

×

×

誰でも、自分の身体(からだ)について、さまざまな危険
から守ろうと配慮(べいり)いたします。例えば、危ない処
へは近寄らないし、たとえ近寄ったとしても、細
心の注意を払って行動(こうどう)します。傷つけば薬(くすり)を買い
求めて適当(てきとう)な治療(ちりょう)を施(せ)します。自分の判断(はんぱん)では及
ばないと考えれば、しかるべき専門(せんもん)の医者(いしゃ)に相談
し、その指示(しじ)に従(したが)い、治療(ちりょう)をうけます。疲れれば
休養(きゅうや)をとります。さらに、ジョギングやその他の
運動(うんどう)をして、適度(てきど)に自分の体を鍛(たく)えます。

これらのことはすべて、自分の体を大切にし、
自分の体を可愛(可愛)がってあげる、自分に対する配
慮(べいりょ)です。このようにして、自分の肉体(りくたい)は健康(けんこう)を保つ
ことが出来るのです。

このような自分の身体(からだ)に対する配慮(べいり)の結果は、
自分(自分)だけでなく自分の周囲(まわり)にいる人々に、さまざま
まな益(えき)をもたらすこととなります。

それに反(かえ)して、自分の身体(からだ)を粗末(そまつ)に扱(あつか)い、暴飲
暴食(ぼうじく)、無謀(むぼう)な遊び、酷使(こくし)などしてしましますと、
忽ち(たち)、怪我(けが)や、事故(じこ)、病氣(びやうき)となり、自分も他人に
もいろいろな迷惑(めいわく)を及ぼすこととなります。

このことは、身体(からだ)のことばかりではなく、自分
の心(こころ)、魂(たま)についても同じ(おな)じことが言(い)えるのです。

×

×

が

以上のことにおいて、注意深く考えていたいただきたいことは自分の身体にしても、自分の心や魂ということについても、それを、あたかも自分の前に在る、とても大切に取り扱い扱わなければならないもののように、思い見るということです。

つまり、自分を自分ではない、とても大切なもののように、自分自身を見、取り扱い、関わるということです。自分にとって大事な大事なものを、いとおしむように可愛がってあげるといふ態度で、自分に関わるということです。

私達は今まで、自分の身体だけでなく、自分の心や魂をそのような思いで見、そのような態度で取り扱って来たでしょうか。

自分の感覚の欲望にだけ従って、肉体も心魂も傷めつける無慈悲な仕打ちをしては来なかったでしょうか。

わたしは、今、人さまに言う前に、このことを自分自身に問い掛けてみるのです。

御覧なさい。どんな小さな火でも大きな森を燃やしてしまふ。舌は火です。舌は「不義の世界」です。

私達の器官の一つで、全身を汚し、移り変わる人生を焼きつくし、自らも地獄の火によって燃やされます。あらゆる種類の獣や鳥、這うものや海の生き物は、人間によって制御されていますし、これまでも制御されて来ました。しかし、舌を制御できる人は

一人もいません。舌は、疲れを知らない悪で、死を

もたらす毒に満ちています。私達は舌で、父である神を賛美し、また、舌で、神にかたどって造られた人間を呪います。同じ口から賛美と呪いが出てくるのです。わたしの兄弟たち、このようなことがあってはなりません。…… あなたがたの中で、知

恵があり分別があるのはだれか。その人は、知恵に相応しい柔和なおこないを、立派な生き方によって示しなさい。しかし、あなたがたは、内心ねたみ深く利己的であるならば、傲慢したり、真理に逆らって嘘をついたりしてはなりません。そのような知恵は、神から来たものではなく、地上のもの、この世のもの、悪魔から出たものです。妬みや利己心のあるところには、混乱やあらゆる悪い行いがあるからです。神から出た知恵は、なによりもまず、純真で、更に、温和で、優しく、従順なものです。憐れみと良い実には満ちています。偏見なく、偽善的でもありません。義の実は、平和を実現する人たちによって柔和のうちにまかれます。

—新約聖書ヤコブの手紙三章—

舌とは思ひであり言葉です。私達は舌でどれほど自分の心魂を傷めつけ虐待し、汚し続けてきたことでしょうか。自分を、先ず愛して上げたいと思います。その時、人さまに多くの善きものを差し上げることが出来自分になるでしょう。

みちしるべ

心の清い人は神を見る 一聖書一

神のご意志を知る

松下昌義

なにごとにおいてもそうですが、そのものを正しく見るということは大切なことです。

正しく見るということは、そのものをそのものに即して見る、ということであって、いうならばそのものの有りのままを見るということなのです。

しかし、一見とても簡単に思えるそれが、なかなか出来ません。

自分が誤解されて悲しみや怒りや悔しさを体験なさったことがおありのことでしょう。私にもあります。また、自分が誤解して見たり聞いたり思っていたことが後で分かり、相手に対して、とても申しわけないことをしてしまったと思うこともあります。

何故私達はものごとを正しく見ることが出来ないのでしょうか。それは、自分の思いで物事を見てとらえ、理解してしまうからでしょう。

自分の思いでものごとを見るとは、自分が持っている理解に基づいて、ものごとを理解し判断してしまうということです。

しかし、よく考えてみますと、それはとても危険なことです。ところが、このとても危険なことを私達はいつも行っているのではないのでしょうか。

ものごとを正しく見るということが、そのものに即して、そのものの有りのままを見る、ということであるならば、それは、とりもなおさず「愛」を持って見るということになります。なぜなら、愛とは、相手の立場に立って見るということだからです。

正しく見るということは、言葉の厳密な意味で相手に同情心をもって見るということであり、相手に共感を覚えて見るということになります。つまり、何も足さず何も引かず、相手を感じ、知り覚えることであります。

このように正しくものごとを見る人に出会ったなら、どんなに有り難く思えることでしょうか。

わたしは、聖書を読んでいて、イエスさまというお方がこのようなお人であることを知るので、イエスさまは「愛のお方」であると言われている

すが、その「愛」とは、ただなにごとでも赦し、受け入れ優しくすると言うことではなく、相手に即してその有りのままを理解するという事です。イエスさまとはそういうお方でした。ですから、どのような人もイエスさまを敬愛したのです。その意味では、イエスさまはとて素直なお方、自然なお方だったのです。

しかし、そのようなイエスさまを、自分の思いや考えで見でしまった人達があり、その人達によって十字架につけられ殺害されてしまわれたのです。

先にイエスさまは、素直にものごとを見る方、そのものに即して有りのままに見る方、その意味で愛のお方、自然なお方だと申しましたが、それは、イエスさまの生涯の言動そのものがとても自然なのです。

例えば、空の鳥を見なさい。野の花を見なさい。とイエスさまが語られるところなどその一つです。

ここでいう「自然なこと」とは、人間がいろいろと考え思判断する行為以前に、すでにある天地の事実そのものこととであります。人がいろいろと理屈をこねくりまわして、とやかく語る以前に、すでに定められ、働き、すべてを支え保っている事実、それこそ「神の御意志」なのですが、それに素直に生きる、その事実謙虚に立っておいでになる、これがイエスさまの言動のよって出てくる処なのです。それから空の鳥を見なさい。野の花を見なさい。という言葉がでてき

たのです。

私達は互いに、自分の思いだけですべてを見ています。夫婦や親子や友達、その他さまざまな社会に於ける人間関係の場で起こるトラブルの殆どが、自分の思いだけで相手を見てるところから生じているのではないのでしょうか。

イエスさまに素直に接するならば、どの人も必ず、素直にものごとを見る目が与えられるようになるでしょう。それは愛をもってものごとを見る目が与えられるということです。自然な生き方ができる価値観を身に付けるということです。

白い色を白い、黒い色を黒いと単純素朴に見、思い語る事ができることが、どれほど大切なことか、私達がそのような智慧を互いにもつことができたなら、そのときこそ、本当の平和と幸福と平安とが私達のところにくることでしょう。本来宗教はそのような智慧を人々に示し与える働きをするものです。決して、「いま一つの違った思いや考え」を人に与えるものではありません。しかし、今の宗教と称されるものを見てみると、「わが教え」「わが宗教」を教える働きをしているように思うのは、わたしの誤解でしょうか。

私達は今「キリスト教」とは別に、素直に、謙虚になつてイエスさまを聖書に尋ねて見たいとおもいます。その時、必ず、その人は「自然なものとしての神のご意志」を知るでしょう。

みちしるべ

神に近づきなさい、そうすれば
神は近づいてくださる

—聖書—

神に近づきなさい

松下昌義

神に近づきなさい。そうすれば、神は近づいてくださいます。

—新約聖書ヤコブの手紙四、八—

これはとても有り難い言葉です。なぜ有り難いことばなのでしょう。それは、私達の靈魂に響いて来る言葉だからです。

有り難く思う言葉は、すべて私達の靈魂に響いてきます。靈魂に響く言葉は、懐かしさをおぼえます。また、以前より自分が求めていたことを示されたように感じます。そして、その言葉は聞いて忘れることはありません。

有り難い言葉は、自分が忘れてしまっていた大切なことを呼び覚ましてくれます。

有り難い言葉は、やさしい風のようにです。私たちの心に語りかけてくれます。日常の雑務で追いついてられ、ふりまわされ患わされて、すっかり忘れていた昔々に知っていた大切なことを、思

い出させてくれます。

有り難い言葉は、なぐさめに満ちています。限り無くふかい平安を与えてくれます。

有り難い言葉は、自分の内でまどろんでいた靈魂を覚ませ、希望と力を誘ってくれます。

ありがたい言葉は、神さまからの呼びかけです。私たちが、すでに戴いていた神さまのお言葉を思い出させてくれるのです。

「世間嘘仮」と言った人がいますが、たしかに世間は嘘と愚かなことが満ちています。その嘘で愚かな言葉を追っかけ、たてまえと理屈の言葉で埋まり、機械的で無味乾燥な言葉を大切にしているのが私達かもしれません。そこでは腹立ちと失望と不安だけが残ります。そのような言葉をどれほど身につけても、平安も希望も力ももうまわって来ません。それどころか、わたしたちの内なる靈魂は汚されるばかりです。その結果、人の悩みはますます増し、苦しみは深くなり、あせりが広がり、救われがたい者となって行きます。

このような世のなかにあって人々を救うのは宗教だけです。勿論、世の中には世間嘘仮に類する宗教が多くあるでしょう。しかし、私たちの靈魂

に優よしく響き語りかけてくる言葉に満ちた宗教があります。

私たちの靈魂に語りかけ、やさしく響く言葉はこの世においてだけでなく、來世らいせいにおいても私たちを救う働きをします。聖書はそのような言葉で満ちています。

新約聖書のヨハネ福音書は、イエスさま御自身を「神の言ことば」として示しています。また、イエスさまを指して「これに聞け」と響きわたった天の声を聞きました。

使徒パウロは自分が命を捧げて三年間伝導したエペソの教会を去るに当たって「今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます。この言葉は、あなたがたを造り上げ、聖なる者とされたすべての人々と共に恵みを受け継がせることができるのです。」と、愛する人達に語りました。(使徒言行録二十章三二節)

私達は、今までどれほどの言葉を語り聞いて来たことでしょうか。しかし、それらの言葉のうちで、自分の靈魂にまでとどき、響き、深い安らぎと喜びと希望と生きる力となった言葉はどれほどあったでしょうか。自分の靈魂を静かに、しかし激しく燃え立たせた言葉がどれほどあったでしょうか。

また、自分が多く語った言葉のうちで、人々の靈魂にまで届くほどの言葉をどれ程語って来たでしょうか。ひよっとすると、聞いた言葉、語った言葉のすべてが虚うそしく響くただのおしゃべりに過ぎなかったのではないのでしょうか。

私達の靈魂は、本当に自分自身の命をゆたかにする言葉を

聞きたいと望んでいます。自分の感覚にこちよく響く言葉ではありません。一時的な威勢いきせのよい言葉ではありません。感情を高ぶらせるだけの言葉でもありません。どのような状態に在っても安らいでいることが出来る言葉を靈魂は求めているのです。

神はわたしたちの内に住ませた靈を、ねたむほどに深く愛しておられ、もっと豊かな恵みをくださる。神は、高慢ごうまんな者を敵とし、謙遜けんそんな者には恵みをお与えになる。だから神に従いなさい。

とヤコブは示した後で、

神に近づきなさい。そうすれば、神は近づいてくださる。

と語ったのです。神がどれほどに私たちを愛して下さいいるかということ、イエスはご自身を持って示して下さいました。イエスさまは語りかける神であります。神に近づくと、神の言葉を謙虚けんこに自分の靈魂で聞くことであります。そのとき、神の言葉は聞く者自身の一部となり平安と調和と歡喜かんぎとをもたらすことでしよう。友よ、神の言葉こそ、わたしたちの道の光り、わたしの歩みを照らす灯ともしびなのです。



みちしるべ

いつも喜んでいなさい。 — 聖書 —

思いをきよめる

松 下 昌 義

信仰を持つということは、善い行いをする事だ、と思ひ込んでいる人がいます。そのように考へることは間違ひではありませんが、その場合大切なことは、心から喜んで善い行いをするということです。それはどういう意味なのかと申しますと、善い行いをする事と自分がよいことなだけではなく、善行をするその思いがその人をよくそだてるのだ、ということなのです。このところを注意深く弁えておくことは、とても大切なことであります。

ですから、善い行いをする事によって、怨みやつらみを持ちたり、自分の内に不満を抱いたりすることがありますが、そのような善行は、かえって自分自身を極度に汚すことになるのです。ですから、そのような結果をもたらす善行なら行わないほうがよいと言えます。

不平を言つてはいけません。不平を言つた者は、滅ぼす者にほろぼされました。

と使徒パウロは言いました。また、次のように彼がいうのも同じです。

全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。

私たちはこのところを思い違ひをしてはなりません。

× ×
善行がその人を清めるのではなく、善行をするその思いがその人を清めるのである。ということをしつかりと確認しておきましょう。

ですから、たとえ自分の全財産を人のために渡しても、もし愛がなければそれは空しい。と聖書は教えるのです。愛がなければとは、その行いに伴う神と人とにたいする感謝と喜びの思いとがなければ、ということなのです。

神と人に対する感謝と喜びを伴つた行いであるならば、それがどのような行いであるうと、その思いの故にその人は天に宝を積むと同時に、自分自身をも豊かにさせているのです。

そのような人は、ますます喜びと希望と力が増し加わり、必ず良き友に出会い、苦しみはその

人から去って行くことでしよう。

× 思いを鎮めたり、思いを清めたりすることはとても大切なことです。なぜなら、思いが荒れていますと、それは完璧に閉じられた扉のように、どんなに善きことも自分の内に入って来ることを遮断してしまうからです。

× 頭では理解でき、理屈では分かるのですが、思いがおさまらない、というようなときがあります。とにかくムシヤクシヤするとか、腹がたつてしようがないとか、ムカムカして鬱憤がおさまらない、などということはだれでもが経験していることです。そのようなとき、口汚く罵ったり、何かに当たりちらしたりします。

× しかし、そうすることは、自分自身をとて汚すことになるのです。それは道德的に善いとか悪いとかいうことではなく、とにかく自分を汚すのです。

× では、自分を汚すと、自分がどのようなことになるのかといいますが、自分の内の聖なる靈的活動が消滅してしまうのです。このことをもうすこし具体的に申しますと、聖なる靈的活動とは、聖なるもの、つまり神的なもの、超越的なものとの交わりのことであり、結局自分自身を汚すと、神的、超越的なものとの交わりが無くなり、この世的な俗の世界に自分自身を縛ってしまうことになるのです。

× その結果、そのような人になが起つて来るのかと申しますと、外面的にはどのような変化もあらわれませんが、し

かし、その人の内面においては、現実志向が強まります。

× そのような人は、本当の善や美や聖を受容しようとする働きが減退し、神聖なる調和と喜びや平安などを得ることが出来なくなってしまうのです。すべての発想が現実的になり、すべてのことを現実的に理解します。また、いつも批判的で鬭争的で合理的な人になりますし、利己的な者となります。

× では、どのようにすれば、私達は自分自身を汚さずにすむのでしょうか。また、どのようにすれば、けがしそうになつた自分をそのところから逃れさせることができるのでしょうか。

× 内からこみあげてくる怒りや怨みやその他さまざまな思いは、誰もおさえつけることはできません。にもかかわらず、むりやりに押さえ付けようとしますと、かならずつな問題が出てまいります。ではどうすればよいのでしょうか。

× そのために、「言葉」と「イメージ」とを自分の内に持つことは、とても大切なことです。

× いつまでも自分の思いがおさまらないということは、私たちが自分を掻き乱しているイメージとか言葉とかを自分の思いの内に持ちつづけているからです。それがひどくなり、遂に寝ても覚めてもそのイメージや言葉をもちつづけて、遂にはそれらが自分を支配するようになるのです。……

× (以上の文章は、この度でました「霊が光るとき」の内からその一部を転載したものです。)

みちしるべ

たとえ死の谷のかけを歩むとも、わざわいを恐れません。
神がわたしと共におられるからです。 — 聖書 —

心の支えをもつ

松下昌義

安心とは、心が安らぐことです。また、心がおちつくことです。「安」とは「おちつく」とも読みます。不安とは心が安らかで不（ない）ことです。

では、心が安らぐとはどういうときなのでしょ
うか。それは、心が支えを持っていてるときです。
心とは魂ともいいますが、それは自分自身のこ
とです。自分とは心なのです。

喜ぶのも心です。怒るのも心です。悲しむのも
心です。嫉妬するのも心です。威張るのも心です。
憎むのも心です。笑うのも心です。欲するのも心
です。希望を抱くのも心です。そしてその心が動
くことを「思う」というのです。さらに、その思
いが固まると「物」になるのです。

このような心についての考えは、これから私
のお話に度々出てまいりますので、覚えておいて
いただければ幸いです。

心と自分とは一つです。ですから、心が悲しく

なりますと、見るものも、聞くものも、そして食
べるものもすべてつまらなくなり、美味しさも感
じなくなってしまうます。また、心が悲しくなり
ますと、考え方も暗く悪くなり、悲観的な方向に
進んでいってしまいます。心が悲しくなりますと、
感情も灰色のように色褪せてしまいます。さらに、
心が悲しくなりますと、肉体が活気をうしない、
その表情も行動も緩慢になってしまいます。

ですから、大切なことは、いつも心が喜びと安
心とを持っていることです。そうするとすべての
ことが素晴らしく感じたり見えるようになります。
そうすると自然に笑顔が生まれてきます。

このように、心と自分とは一つなのです。

心が動くと思いととなり、思いが固まると物とな
る、と言いましたが、心の病が肉体的な疾患を起
こす、ということは今日ではだれでも知っていま
す。しかし、心が身体（物）につよく関わってい
るといことが医学的に理解され、精神身体医学
学会が日本につくられ、その三年後に九州大学医
学部で日本で最初に「診療内科」が創設されたの
は一九六三年ですから、ついこのあいだのことです。

さらに、「思う」ということで、思い出すのは、
十七世紀のフランスの哲学者にルネ・デカルトと

いう人がいますが、この人は確かな真理を求めするためにそれまで確実なことだと思われていることがらを疑いの目をもって見ることにより、全て確実なものはないのだと思うようになりました。しかし、彼にとってどうしても疑うことが出来ないことが一つありました。それは、疑っている自分についてです。そこで、彼は言いました。「われ思う、故にわれあり」と。この真理は最も確かであるとして、このことを自分の哲学の第一原理としたのです。

彼はこのような考えを自分が持つに到った道筋を、「方法序説」という書物にしました。興味のある方はお読みになればよいとおもいます。

とにかく、デカルトさんが、最後に疑うことが出来ないものとして「わたしが思うている」と言うことに到ったことは先に、心が動くと思いとされると言いましたこととあわせると、心は思い、思いは自分となるわけですから、デカルトさんの哲学ではどうであれ、とても興味あることだと思ふのです。

それにしても、心に安心を得るためにはなにが必要なのでしょう。また、どうすればよいのでしょうか。それは、心に支えをもつことです。それはほかならぬ、自分自身に支えをもつということになります。

それにしても、「わたしはいいたい、なにを自分の支えにして生きているのだろうか」と、反省してみることはとても

大切なことです。

自分になにごとも起こらず、来る日も来る日も同じ事のかえしの生活をしている時には、別に心の支えがなくてもよいのです。何故ならば、そのような生き方は機械が同じ運動をしているような状態だからです。機械には心は必要ではないのです。つまり、何も考えず、何も感じない生活だからです。

しかし、私達の人生にはさまざまなことが起こり、どうしても避けて通れないこと、またどうにも出来ない不平や悲しみに出会うものです。親も、兄弟も、友達も、お金でも知識でも乗り越えられないことがらに出会います。そして、最後の頼りである「自分」にもどうすることも出来ない事柄に出会ふのが人生です。そのときになって、はじめて自分の心に確かな安心の支えの必要を知るのであります。ありきたりの支えではどうにも成らないことを知るのであります。

しかし、確かな支えを自分の心に確りと持っている者は決して倒れません。必ず立ち上がるのです。いな、その支えがその人を立ち上らせ、安心へと導くのです。

今、幼い子供たちと毎日唱和している言葉があります。

うるたえてはならない。おののいてはならない。
あなたがどこに行っても、あなたの神は共にいる。

—旧約聖書ヨシュヤ記 一章九節—

みちしるべ

成長させて下さるのは神である 一聖書一

自分の「分」

松 下 昌 義

人にはそれぞれに分ぶんというものがありません。「分ぶん」という漢字は「ワカツ」と一般に読まれていますが、その他に「ツトメ」とか「モチマエ」とも読むようです。とても興味深い文字です。

分ぶんということだと思ひ出すことは、使徒パウロがコリントの教会に送った手紙の一節です。

× ×

この世のどこでも起こっていることが、コリントの教会に於いても起こりました。「わたしはパウロ先生派だ」「いや、私はアポロ先生派だ」と信徒どうしが相手を非難し合つて憎しみ争ひました。そのことについて悲しく思つたパウロは、次のように記して信徒のもとへ手紙を送りました。

「……アポロとは何者か。また、パウロとは何者か。この二人は、あなたがたを信仰に導くためにそれぞれ神がお与えになつた分にぶんに応じて仕えた者です。わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもな

く、成長させてくださる神です。」

(第一コリント三・五)

× ×

人が、自分の人生じんせいの導師だうしとして尊敬出来る人に出会うことは、とても大切なことです。誰も尊敬出来ない。頼れるのは自分だけだと言う人の人生は哀れです。真まことに尊敬できる師に出会うことは人生最大の宝を自分にもつことです。そのような人の人生はとても豊かな内容となり、自分一代で何代分もの人生を深く生きた知恵と喜びとを得ることになります。

しかし、どれほど偉大な師であっても、その師を自分の偶像ごうざう、つまり神とすることは愚かなことです。誰かを神のように崇めるとき、人はそれぞれに崇める師をめぐつて、「うちの先生が偉い」「いや、うちの先生こそ偉大だ」と争うことになり、その「先生」を立てて分派をつくり互いに軽蔑けいべつし憎しみ合い、相手の師のあることないことを論ろんうことになります。

本当に尊敬に値する師は、自分が人々から神のように偉大だと仰がれて満足している者ではありません。もし、それで満足し満悦している師であるならば、これほど愚劣ぐろつで浅薄せんぱくで低俗ていぞくな人間はいません。しかし、このような人間が世間で師と仰

がれていることがあります。けだし、そのような人間を師と崇めている集団そのものの質は、当然、その師に相應しい者達の集まりであることも確かです。

偉大な師は弟子を拒絶します。御存知のとおり親鸞もそのひとりです。彼は言います。「わが弟子ひとりの弟子といふ相論のそふらうらんこと、もてのほかの子細なり、親鸞は弟子一人もたずそふらう」と。またソクラテスも同様に「わたしには弟子というものはいない」と言いました。そしてイエスも「あなたがたを僕とは呼ばない。わたしはあなたがたを友と呼ぶ」と言われた。勿論、パウロに於いても上記のとおりである。

では、師たる者はいかなる者なのでしょう。それは、真実を自分が生きることによつて、その事実を示す者です。

先のパウロの手紙は、「パウロ先生」「アポロ先生」と騒ぎたてている人々に、「パウロ何者ぞ」「アポロ何者ぞ」と一喝し、われわれは植ゑたる者、そして水を注ぎし者にしかすぎないのだ。決して育てた者ではない。あなたがたを真理の開眼者に育てたのは神なのである。植ゑる者も水を注ぐ者も少しくお手伝いをしただけの者にて、とるに足りない者なのだ。本当に尊いかたは神であると、真に仰ぐべきものなのたるかを入々に示しました。

このことは、親鸞においても同じであります。彼はさとすように言います。「そのゆえは、わがはからいに、人に念

仏をもうせさうらはばこそ、弟子にてもそふらはめ、彌陀の御もようしにあづかつて念仏まふしそふろう人を、わが弟子と申すこと荒涼のことなり」。彼が言うことは、神さまが、その人をとらえ、真理に眼を開かして下さったものを、あたたかも自分がするようにしたかのように思い込むことは、そら恐ろしいことだ。というのです。(歎異抄六)

つまり、本当に偉大な師は、自分の「分」をよくよく心得ている人であります。「それぞれ神がお与えになった分に応じて仕えた者です」とパウロは言いましたが、彼は自分自身である神自身を、自分に与えられた能力を用いて、ひたすら人々に対して指し示す指となり切ったのです。ここに彼の偉大な導師である理由があったのです。

どの人にも神さまが分かち与えてくださったその人の「分」があります。はたして、私達は神様からの自分の「分」をどれほど知っているでしょうか。また、その「分」を自分の周囲の人々と分かちあうことによつて、与えてくださった神さまを喜び、神様に感謝しているでしょうか。

最後に「バプテスマのヨハネ」という偉大な霊的指導者が自分の分をはたし終えたあと、喜びに満たされて弟子達に語った言葉に耳を傾けましょう。

「あの方は榮え、わたしはおとろえねばならない」

みちるべ

人の一步一步を定めるのは神である。人は自からの道について何を理解していようか。 — 聖書 —

神の御旨

松下昌義

世界が不思議で満ちているように、私達の人生も不思議で満ちています。

なにごとでも、当たり前のこととして受け止めているならば、不思議は見えてきません。しかし自分に起こる一つ一つのことを素直に見つめてみますと、たちまちすべてのことが不思議に思えてきます。

不思議とは読んで字のごとく、私達の思議の及ばざることという事です。

私達はなにごとについてもよく知っていると思っ
ていますが、その実にも知ってはいないので
す。例えば、雨が降って来るといふことは、とて
も不思議なことなのです。だのに、私達はそれを
不思議とは思っていません。何故なのでしょう
か。それは、雨が降る現象について科学的に説明が
出来る、ということと、何故、どうして雨が降るよ
うになっているのかということについての答えと
を混同してしまっているからです。

おそらく、どれほどの偉大な科学者でも、何故
どうして雨が地球に降るようになっていたのかと
いう問いには、誰も正しく答えることは出来ない
でしょう。彼が本当に偉大な科学者であるなら、
きっと、次のように言うに違いありません。

「それは、神さまに聞いてくれ」

科学はただ、現象についての説明はしてくれて
も、何故、どうしてそれなのかということについ
ては、正しく答えてはくれません。それは、人間
にとつて不思議なことなのです。

私は男です。何故わたしは男なのでしょう
か。私は昭和一桁年代の生まれです。どうして私は平
成の年代に生まれて来なかつたのでしょうか。私
は日本人です。何故わたしは日本人なのでしょう
か。これらのことについて誰も正しく答えてはく
れません。誰にも分からない不思議なことな
のです。

このように、自分や世界について素直に尋ねて
みると、自分が不思議に包まれていることに気づ
くだけでなく、当の自分自身が不思議な者である
ことを知るようになります。私はわたしだと思っ
ていますが、本当にわたしは、私という者を知っ
ているのでしょうか。鏡に自分の姿を写して、そこ

にいる私に向かつて、「わたしは誰なのでしょうか」「私は何なのでしょうか」「何故わたしは此処にいるのでしょうか」と問うてみたら、一体どのような答えが返ってくるのでしょうか。

世界は不思議でみちています。私達の人生も不思議でみちています。だれもが、不思議を生きて来ました。そして今も不思議を生きており、これから不思議を生きて行くのです。

私達は知恵を持ち、知識を持っています。その能力を使つて一生懸命に明日に向かつて自分を生きて行かなければなりません。しかし、よくよく考えてみると、最後には成るようにならされるのです。と申しましても、決してなにもしなくても結果は同じであるなどと言っているではありません。そうではなくて、成るものだけが成らされるのだと言っているのです。

不思議の世界に気づくとき、私達は謙虚けんこにされます。謙虚けんこにされるとは、受け身でものごとに出会う態度が出来て来るということです。具体的に言いますと、「してやった」ということが「させていだいた」ということになるのです。「生きて来た」ということが「生かさせていだいた」となり、「出会った」ということが「出会わせていだいた」となり、「食べた」ということが「食べさせていだいた」となります。このような態度は弱々しく消極的な態度であるようにおもわれますが、決してそうではありません。むしろこの態度は

とても強い積極的な姿勢だといえます。なぜなら、するのではなく、させてもらうのだからです。するの不安があります。しかし、させてもらうには安心がその思いの底そこにあります。

人生の不思議と対峙たいじするとき、人はそこに自分の思いをはるかに超えた、神の御旨みひねとしか表現しようのない大いなる命の御手みでを感じるようになります。

過ぎ越し方を省かえりみる者は、いろいろなきことがあったがよくぞ歩んで来たことだと感慨かんがいをもちます。そして、「不思議なことだ」と思います。その不思議に気づく人は、きっと、生きて来たことが、生かされて来たことに変わり、その思いは自然と「有り難ありがたきこと」とつまり、決して当たり前のことではなく、有ることが難むづかしことが有りえたのだと感謝するようになりましょう。

理解出来ない不安と苦しみの中に生きている者は、絶望するだけでなく、このことにおいて、私に對する神の御旨みひねがあり、その御旨みひねが何なのだろうかと問いつつ、その苦しみを戴いたくなら、必ず神さまは助けて下さり、御旨みひねの何であるかを、喜びと感謝とを伴つて、相応ふさわしい時にその人に明らかにしてください。

すべての不思議は、神の御旨みひねのなかにあるのです。それに気づく人は、自分の人生に本当の拠たり所を得るとともに、生きる意義と喜びとを知るようになるでしょう。

みちしるべ

生まぬるいので、あなたを口から
吐き出そう 一聖書一

あなたは どうなのだ

松 下 昌 松

あるとき、イエスさまが弟子達にお尋ねになりました。「人々はわたしのことを何者だと言っているか」と。弟子たちは答えました。「あの偉大な予言者ヨハネのようだと仰っています」するとほかの弟子たちも言いました。「いや、エレミヤのような予言者だとも言っています」。別の弟子も言いました。「天に昇って行ったエリヤだといっています」。こうして弟子たちは口々に人々がイエスについて噂うわさしていることを、誇ほこらしげにイエスさまに伝えました。それを聞いていたイエスさまは、弟子たちの目を見て言われました。「それでは、あなたがたは、わたしを何者だと言うのか」と。

(この場面を正しく聖書に見たい方は、新約聖書マタイによる福音書十六章十三節以下をお読みください。)

x

x

それにしても、なぜ、イエスさまは弟子達にこのような質問をなされたのでしょうか。ご自分が世間や弟子達からどのような思われているのかということを心配されて、質問なされたのでしょうか。

か。

このところをよく読むとき、イエスさまの質問なされる意図が、とても深いところにあることに、私達は気づかされます。そのことについて少し思いをめぐらしてみましよう。

実存哲学者の初めの人と
言われていすキルケゴールという人は、「水平化」とか「平均化」と言う言葉をよく使いましたが、その意味は、簡単に申しますと、皆が同じ言葉を使い、同じ考えを持ち、同じ行動をする者となることです。これを少し日常的に言いますと、同じ物を食べ、同じ服を着、同じ靴を履き、同じテレビ番組を見、同じ自動車に乗り、同じ物を持ち、同じ週刊誌を読み、同じ話題を口にし、同じことに関心を寄せ、同じ遊びを為し、同じ処へ集まる。従って皆が同じような顔になっている。と言うことが「水平化」「平均化」ということです。

そして、キルケゴールさんはそのようになってしまった人々は「無名人」だと言ったのです。それは言うならば、顔も名前も消えてしまっていて、ここには人間という個人は居なくなってしまうという事です。だから彼は、そのような人間の集団を、「だれもがいない幻まぼろしのような大衆」だ、とも言いました。彼は百五十年前に、今日の人

間が陥る姿の始まりを見ていたのです。

「だれもがいない幻のような大衆」とは、具体的な個人、つまり「自分」「わたし」という主体的な人間が居ないということなのです。これは、とても恐ろしいことです。

しかし、もっと恐ろしいことは、同じ言葉を使い、同じ考えを持ち、同じ行動をすることに「安心」を覚え、そのような人であることが、あたかも「教養人」であるかのように思い込んでしまう者になりさがることです。

このような状態から生まれて来ることは真実なるものに対する熱情の欠如です。さらに、無責任な傍観者のな生き方です。そして、この状況にあつては、最早、主体的な行為の当事者としての生き生きした人間が居ません。

まさに、イエスさまが弟子たちに迫ったことは、そのような人間にならないことであり、そのような人間からの救出でもあったのです。このことが、先の弟子たちに対するイエスさまの意図だったのであります。

「あの人が〇〇と書いています」「この人が××と書いています」などということはどうでもよいことだ。「あなたはわたしを何者だというのか」。「おまえはどうなのだ」とイエスさまは迫られるのです。無責任な傍観者の態度ではなく「主体としてのお前の生きた態度決定を言ってみろ」と迫られるのです。これを別な言葉でいいますと、「お前自身として決断してみなさい」ということなのです。

私達は自分自身として行為する決断をする時、はじめて自分になるのです。他人の言うまま、世間が動くままに流される生き方は、借り物による生き方であり、自分を生きたことにはなりません。自分自身の身体で、心で、考えで、思いで確かに触れ、味わい、よくよく考え、確信して決断するところに、本当の自分があるのです。

ペテロという弟子がイエスさまと一緒にいたとき、向こうからもう一人の弟子が来ました。そこで彼が「先生、この人はどうなるのでしょうか」と尋ねました。イエスさまは答えていわれた。「たとえ彼がいままで生きていることをわたしが望んだとしても、あなたに何の関わりがあるか。あなたは、わたしに従いなさい」と。(ヨハネ福音書二一・二〇)

信仰の人は、神を見つめて自分で毅然と立たしめられる人になることであります。

「あなたは冷たくもなく、熱くもない。むしろ、冷たいか熱いかであってほしい。このように、熱くもなく冷たくもなく生温いので、あなたを口から吐き出そう」

(黙示録三・一五)

イエスさまは、弟子達が神と人の前に、人間として生きる決断を迫られたのです。このイエスさまの迫りは、現代人にも同じように向けられています。



みちるベイト

キリストがわが内にありて生きている

— 聖書 —

生き甲斐

松下昌義

誰でも、自分の目の前の事柄に関心のすべてをうばわれて、夢中に生きているときには、まったく自分自身の生きる姿を省みる余裕をもつことはできません。

しかし、ふと我にかえて、自分自身の生きている様子を省みるとき、「私の人生はこれでよいのか」と思わせられます。

このように自分の生き方についての深い反省は普通、所謂中年から壮年に到る年令において、自分の内に生じて来るようです。生きて来たことについての虚無感、生きて行くことについての感、何とも言えない孤独感というものは、誰の心の内にも起こることです。

×

×

毎日同じことを繰り返し、その繰り返しが出来なくなれば、自分の人生が終わる、と思う時、感動も喜びもない機械仕掛けの人形のような自分の人生が無意味に思えてきて、なにもかも嫌になっ

てしまう、ということがあるものです。そのような時に、改めて「わたしの生き甲斐と

は何なのだろうか」と考えてしまいますし、また「生き甲斐って何なのだろうか、とも思うものです。

×

×

「生き甲斐」とは一般に「生きるはりあい」とか「いきるめあて」などと説明されているようですが、それではもうひとつハッキリと理解できません。

生き甲斐の「甲斐」とはどういうことなのでしょう。字義によりますと「甲」とは「草木が初生の際、種を戴き芽をふきだし貌を象る。転じてはじめ、第一という……」とありました。そして「斐」とは、「あやありて美しき貌」とあり、どうやら、漢字の意味における「甲斐」とは、一番美しき貌ということのようであります。では「貌」とはどのような意味でのかたちなのかと、これもしらべてみますと、「貌」とは人間全体のかたち、のことであり「すがた」または「ふるまい」とも読む、とあり、これで、いちおう「生き甲斐」ということが漢字において意味していることのおおよそが、次のように理解できます。即ち「生きている最も美しいすがた」のことなのだ。

×

×

生き甲斐ということが「生きている最も美しいすがた」のことだとするならば、自分に生き甲斐

を持つということは、自分が最も美しい生きるすがた、また、
はかたちを持つということになります。

はたして、私達は、自分自身、自分が生きる最も美しい生
きる貌かたちを、どのように考えているのでしょうか。ひよっとす
ると、自分自身にも持っていないのではないのでしょうか。

食べて働き、遊んで楽しみ、子どもを生み育て、寝て起き
て食べて、働きたまた寝て起きて……ということならば動物だ
ってしていることです。しかし、人間は魂(知・情・意)を
持ち、日々それを働かし、自分で決断して生きている者です。
ただ、動物のように動いているだけでは決して満足すること
は出来ないものです。

その昔、ギリシャのある哲人が、昼日中、明かりを灯して
何かを求め探すように歩いていました。「あなたは何をして
いるのか」と人が尋ねると、「私は人間を探しているのだ」と
と答えたと言います。このような話は、日本にもあるよう
ですが、私達の心に色々な意味で響いて来ます。かの哲人の
真意がどのようなものであったか、私には分かりませんが、
私にとってこの話は、自分の最も美しい生き方の貌かたちさがしの
様さまのように思えてくるのです。

私達は、結局、自分を探すために生きていてのではないで
しょうか。別な言い方をすれば、自分が自分として本当に生
きることを求めて生きているのではないのでしょうか。それは
他でもなく、自分が最も美しく生きる貌かたちを求めて生きている
ということでありませう。それを一口にいいますと、自分の生

き甲斐を求める、ということになるのです。

私は、人間の生き甲斐というものは多種多様にあるもの
とは思いません。たしかに、各自それぞれにその現れる形は
ちがうでしょうが、根本のところでは、人間の最も美しい貌かたち
としての生き方は一つだと思えます。それは、自分を支え生
かしている命の根源に目覚めることにはかなりませぬ。自分
を生かしている自分の命の根っこに目覚めること、それは自
分の生命の故郷を知ることです。そして、そこに自分自身を
立たしめることこそ、自分を最も美しく生きる貌かたちを得る智恵
を得ることになるのであります。その智恵とは何でしょうか。
それは「生かされている感謝の心」のことです。生きて来た
のではなく生かされて来たのだ、ということに気づくことは
自分の内に、喜びと感謝と平安とを生み出します。生きる不
安とは、自分を生かして下さっている方を知らない不安です。
人生の感あはれいと、自分を生かし導いて下さっているお方を知
らない感あはれいです。虚無感むなみとは、自分の命をいつも支え続けて
いて下さるお方を知らない空しさです。限り無い孤独感とは
自分と共に絶えずおられ、共に歩んで下さる命の支えとなる
お方を知らない寂しさです。

自分自身の命の根っこである神を知り、大安心に生きる貌かたち
の自分になることを「キリストのかたちになる」と聖書は言
ったのです。人は、自分の命の根っこに気づくとき、どのよ
うな場においても生き甲斐を見出し感謝して生きる者となる
でしょう。

みちしるべライト

イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。
そのことによって、わたしたちは愛を知りました。 — 聖書 —

仕え合う幸い

松下昌義

「受けるよりも与える方が幸いである」とイエスさまが言われた言葉を、いつも思い出すようにわたしは自分の身をもって示してきました。と使徒パウロは語っています。(使徒行録二十章二十五節) いったい、「受けるよりも与える方が幸いである」とは、どういうことなのでしょうか。

× ×
普通私達は、与えるより受ける方が幸いなことだと思っています。与えることは自分のものを失うことであり、受けることは自分のものが増し加わることからです。

しかし、この道理は、はたして正しいのでしょうか。この世の中を深く見るとき、最も深いところでの道理は、すべて「与えることに」に始まっていることに気づきます。互いに自分を相手に与えることによって、自分自身を保っていることに気づくのです。第一に、私達が生きているのは、すべてを与えられているからです。空気、水、光り、食物となるものも、とにかく私達はすべてを戴き受けてこそ、その命を保っていられるのです。

目を自然界に転ずる時、そこに在るものはすべて互いに自分を当然の如くに相手に与えることによって、それ自身を成り立たせています。

× ×
しかし、人間にはそれが当然のこととして受け取れないのはどうした事なのでしょう。それは私達が、まず自分が受けるということからはじめるからです。自分が在って他人が在ると思っているからです。また、他人がいなくても自分自身として在り得ると思いつ込んでいます。これが利己的ということでは。

このような利己的な考えはどこに行っても通用しません。なぜなら、この世もあの世も、そのような道理によって成り立っていないからです。なにがとも、先ず自分を与えるということから始まっていることを、しっかりと心得ておきたいと思えます。

× ×
「しあわせ」という言葉を「仕あわせ」とも書きます。それは、「仕え合う」ところに「しあわせ」があるからでしょう。

互いに仕え合うということ、つまり「与え合う」ということは、道徳的な命令でも規律でもなく、ものごとの道理にかなった当たり前のこと、自然なことなのです。ですから、与えることを忘れ、

ただ受けることばかり考えている生き方はとても不自然な生き方だといえます。ものごとの道理に叶っていない在り方だといえます。すべてものごとの道理に叶っていないことは安定性がなく、やがては自らの矛盾によって必ず自滅してしまいます。

×
×
仕え合うということ、与え合うということ、一口で言い表すと、それは「愛する」ということになります。

聖書は「愛」ということを最も大切なこととして説いています。その理由は、愛がすべてのものごとの成り立ちの根本にあるからです。「聖書」に書いてあるから「愛」が大切なわけではありません。聖書に書いてあるから無かるうが「愛」は、ものごとの成り立ちの根本の事実なのです。だからこそ聖書は「愛」を最も大切なこととして説いているのです。愛はものごとの一切の成り立ちの根本的な道理であり事実なのであります。

イエスさまは、この根本的な道理を当たり前のこととして生きられました。そしておっしゃいました。

わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟です。友のために自分を捨てること、これ以上に大きな愛はない。

—ヨハネ福音書十五章十二節—

これは「仕え合う」こと、「与え合う」こと、つまり「愛

し合う」ことの極致を語られたのです。それはとりもなおさず、人間の幸いの極致であり、一切の根源的な道理であり事実そのものの在り方を示されたのです。

このような物事の道理の世界の状態について聖書は次のような確かな言葉で語っています。

×
×
わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内です。

人は与えるものによって富み、拒むものによって貧しくなる。といわれますが、本当にそのとおりだと思えます。

愛なく利己的な思いでただ与えるものは、虚しく失うだけです。しかし、愛を持って与えるなら、それがどれほどわずかな物であっても、その愛は道理に叶っている故に、その人は豊かになり、神の微笑みの恵みにつつまれる事でしょう。

×
×
例え自分の全財産を人のために与えても、誇ろうとして自分の身を死に引き渡そうとも愛がなければ、わたしに何の益もない。と聖書は示します。(コリント第一、十三章一節)
一生を終えて後に残るものはわれわれが集めたものでなく、われわれが与えたものである。という言葉を思い出します。イエスさまはその御生涯をとおして、人の本当の幸いになる道を生きて示されました。いま静かに、自分の生き方を省みましよう。

みちるべライト

見ても見ず、聞いても聞かず、したがって
救われることはない。 — 聖書 —

言葉を超えて そのままを見る

松下昌義

人は多くの場合、何事についても頭だけで理解して行動し、また批判したりするものです。

頭だけで理解するとは、理屈で理解することです。そして、理屈で理解するとは、言葉で理解するということになります。

さらに、言葉で理解するとは、言葉でそのものを粹決めすること、言い換えれば、言葉でそのものを限定してしまうことです。その結果、言葉で粹決めしてしまったそのものが、事実本当に在るかのように思い込んでしまう、ということとても奇妙なことが起こってしまいます。

つまり、現実^{じつじ}に在るそのものの本当の姿が、言葉で造り出されたそれに、とって換えられ、本当のそれを見失ってしまうということが起こるので、このようなことを、言葉による観念化、精神化と言います。

例えば、人を見るに、「あの人は悪い人だ」と自分の言葉で、ある人を粹決めしてしまいますとその言葉によって造りあげられたその人の姿が、その人となり、本当のその人の姿が見えなくなっ

てしまいます。つまり、言葉で造りあげられた観念が、本当のその人の姿を覆って見えなくしてしまうのです。

しかし、なにかのきっかけで、その人の善良で誠実な人柄に深くふれて、その人の本当の姿を知った時、その人について自分が持っていた姿が、実は、言葉による観念で造り出していた幻想であり、虚構にすぎなかったことに気づくのです。ですから、このように、言葉によって造り出された観念の世界が崩れて、本当の姿が自分に見えるてくることを「悔い改め」というのです。

このような、言葉による観念化、精神化ということは、私達の生活のあらゆる面で起こっています。でも、私達はそれに気づかないで生活しているのです。

もう一つの例を申しますと、私達が「白ばら」と言う場合、「白ばら」を想うかべます。しかし、ここでよく考えていただきたいことは、「白ばら」は初めから「白ばら」ではなかったということです。そのものはありましたが、ある時誰かが「白ばら」と言葉で言い表したのです。その時から、それは「白ばら」となったのです。しかし、そのものを「白ばら」と言葉され（名づけ

られる)たことによって、それは「白ばら」以外の言葉でよ
んではならなくなってしまったのです。つまりそれ以外の言
葉でそれを語ることは「間違ったこと」となってしまうので
す。このことを、「言葉による限定」というのです。

それだけではありません。「言葉によって限定」されると
き、「白ばら」という言葉だけが、独り歩きをはじめ、その
結果、白ばらと呼ばれる「そのもの」よりも、「白ばら」と
いう言葉で造りあげられた「白ばら」の方が、本当にあるか
のように思い込まれてしまい、実物の「白ばら」とよばれる
それが、無くても「白ばらの観念」だけが、あたかも本当に
あるかのように思い込まれてしまうのです。つまり、「白ば
ら」の観念化、精神化ということですが、そのとき、とても
困ったことが起こりだすのです。それは、言葉によって、観
念化された「白ばら」で無いような姿形をした白ばらを見る
とき、人は「これは、本当の白ばらではない」と言いだすの
です。それでも、なお白ばらだと言うと「あの人は間違っ
ている」と言って笑うか、否定するのです。

その人達は、事実は、言葉を超えているのだということを
まったく知らず、言葉で限定し観念化して自分に持っている
言わば「幻想」のそれに振り回されて、それにしがみついで
いるのです。

このようなことは、私達の生活の場でいつでも起こってお
り、人が主義主張に生きる場合や宗教信仰の場合には、特に
生じやすいのです。大抵の熱狂主義的な現象をもたらす状況

の基盤には、このような観念化現象が隠れているものです。

言葉による理屈だけで造り出された観念の世界を、確かな
ものだと信じ込み、ものごとの「ありのまま」を素直に、し
かも、鋭く見抜く智慧を欠いたままで、見たり、聞いたり、
信じたり、語ったり、行動したりすることは、とても愚かな
ことであります。それは、自分が造り出した幻想と虚構の世
界を、事実の世界だと思い込み、自分で自分を振り回して生
きている一人よがりの姿であります。

それだからこそ、イエスさまは弟子たちに言われました。

蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい。

— マタイ福音書 十章十六節 —

ものごとの真をそのままに見る目を得たいと願います。見
ても見ず、聞いても聞かずであってはなりません。真実なる
ものを見させていただくためには、ひたすらなる慎みと、謙
遜と、沈黙と謙りとが大切なことです。

イエスさまは、この世の言葉からも、形や姿からも自由で
した。なぜなら、言葉や形や姿を乗り越え、しかも、言葉や形
姿などを生み出す「真実」なるものを見ておられたからです。
真の宗教というものは、このような迷いから私達をめざめ
させ、ものごとの「ありのまま」を見る目を与えてくれるも
のです。そのとき、すべてが有り難く、感謝すべきものであ
ることに気づくようになります。

みちるべライト

神が命の息を吹き入れられると
人は生きる者となった。 — 聖書 —

動く者から生きる者へ

松下昌義

人間とは、とても不思議な者です。ただ生きて
いるだけでは決して満足しません。それは、人間
は自分が生きているということを意識できる者だ
からです。動物は、自分が生きているということ
を意識していません。ですから自分について悲し
みも喜びもなく、明日の自分について心配するこ
ともないのです。

しかし、人間は自分が生きているということ
意識できますから、自分をよりよく生かしたいと
いう願いと希望とが出てくるのです。つまり、よ
りよい自分でありたいという願いが出てきて努力
するようになるのです。

× 自分が生きていることを意識できるということ
は、生きている自分自身を見つめることができる
ということであります。

× 例えば、大抵の人は自分の姿を鏡に映して、そ
こに映った自分の姿を眺めます。つまり、自分の姿
を自分が見つめるということをしています。この
ことが「自分を意識する」ということなのです。
また、このことを「自分を自覚する」ともいいます。

人が自分を意識しはじめ、自分を自覚し始め、
自分を自分が眺めることをし始めますと、同時に
いろいろな悩みをもつようになります。自分の姿
を自分が知るようになるのですから、もっと美し
くになりたい、もっと正しくありたい、もっと強く
ありたい、もっとかっこよくありたい、もっと学
歴や知識や技術を自分にもちたい、他人から褒め
られたい、好かれたい、愛されたい。それに、自
分の将来のことなど……とにかく、自分のこと
で悲しんだり、喜んだり、失望したり、傲慢にな
ったり、他人を恨んだりするようになります。

しかし、動物は先にも言いましたように、自分
が生きていることを意識し、自覚していません。
つまり、自分の姿を鏡に映して、自分の姿に喜ん
だり悲しんだりはいたしません。ましてや、他の
仲間の動物の姿と比べて、自分を悲しんだり、威
張ったりはいたしませんし、ましてや、自分の将
来について悩むということもありません。

× このように、人間だけが自分の生きていること
を意識出来、自覚出来、眺めることが出来るのです。

× ではなぜ、人間だけがそのような者なのでしょ
うか。それは、神さまがそのように人間を創造な
されたのだと言うよりほかありません。でも「そ
うではない、人間にはそのように自分が自覚出来

るような知能があるからだ」と言われる方があるかもしれない。せんか、それは答えにはなりません。なぜなら「なぜ人間にだけそのような知能が備えられているのですか」ということには誰もこたえられないからです。

これについて、聖書は人間の創造そうぞうについて、とても興味深いことを語っています。

主な神がみは土（アダマ）の塵ちりで人（アダム）を形かたちつくり

その鼻はなに命いのちの息いきを吹き入れられた。人はこうして生きる者ものとなった。

——旧約聖書創世記二章六節——

人がもと「土ちりの塵ちり」であるということもなるほどと思えますが、それよりも、ここでは、人間は「神の命の息を吹き入れられると生きた者となった」と言うことです。つまりここで、聖書が語っていることは、人間は神により命を与えられて「生きた者」となったのだということです。「生きた者」とは、「人格となった」という言葉であるとその道の専門家せんがは教えています。

この「人格となった」とは、とりもなおさず、自分が生きていることを自覚できる者、堅たい言い方をしますと「主体たいたい」となったと言うことです。

人間とはなんと素晴すはらしい者として創造そうぞうされているのです。ようか。

自分の生きることを意識でき、自分で自分の人生を主体的に、自覚的に選んで生きることが出来る。これほど有り難いことはありません。しかし、反面、それほど責任が負わされ

ているのだともいえます。

動物は、自分の生きていることが自覚出来ず、与えられたままの本能的な欲望のおもむくままに「動いて」いるだけです。それだけに、彼らは生きることことに責任を持ってはいません。

でも、はたしてすべての人間が、自分の生きることを、本ほん当たうに主体的、自覚的に生きているのでしょうか。ひよっとすると、動物的な欲望の満足のためにのみ、自分に与えられた智恵ちゑや能力を使って動うごいているだけではないでしょうか。

自分が何故生きているのか、ということも少しも考えることなく、ただ、自分の欲を満たすだけに、生きて来たのではないのでしょうか。それなら、動物がただ「動いて」いるのと同じです。

目先の感覚的な欲望を満足させるためだけに「動いて」来た人は、かならず、自分の人生を、真面目に、素直に見るととき「わたしは、なんのために生きて来たのだろうか」と思うようになるでしょう。

歳をとり、老いてからでは遅すぎます。自分の外ばかりに目をとられず、自分自身の生きる姿に目を確しかりと向けてみましよう。聖書は、どのように人は生きるべきか、ということを示すと共に、何に目を向け、何が人を本当に人間らしく生かすのかということことを教しえ示ししてくれます。聖書は教養のためとか、キリスト教の教しえの書物しよぶつでなく、広く人間が人間らしく生き抜き人生を完成させるための書物しよぶつなのであります。

みろしるべ

わたしは、神の御言葉をまちのぞみます。

— 聖書 —

聖書の言葉

松下正義

聖書のなかに「互いに……」という言葉がたびたび出てまいります。新約聖書からそれらを少し紹介してみよう。

「互いに和らぎなさい」「互いに愛し合いなさい」「進んで互いに尊敬し合いなさい」「互いに思ふことをひとつにし、高ぶった思いを捨てなさい」「愛をもって互いに仕え合いなさい」「寛容をしめし、愛をもって互いに忍びあいなさい」「互いに慰め合いなさい」「互いに悪口を言い合ってはならない」「互いに不平を言い合ってはならない」「互いにもてなし合いなさい」「互いに挨拶をしなさい」「互いに罪を告白し合いなさい」「互いにさばきあうことはやめよう」「互いに足を洗いなさい」「互いに信仰によって、励まし合いなさい」……。

×
×
何度もくりかえして、声を出して唱えるように読んでみましょう。自分の身体に快く、これらがしみ込んでいくような気がします。そして、自身を清めてくれるように感じます。慰めてくれるようにも感じます。平安が自分の深いところか

らわきあがってくるのを覚えます。深い反省の心が、自分の内に満ちてくるのを覚えます。

×
×
「互」という漢字は、「まじわる」とも読みますし、「入りかわる」とも読むようです。

なるほどと思いました。互いという言葉は、自分の事ばかり考えて、狭く小さな我に閉じてもって利己的な思いを持って生きている自分を、そこから解き放ってくれる響きをもった言葉だったのです。

「おのおの自分の事ばかりでなく、他人のことも考えなさい」(新約聖書ピリピ人への手紙二・四)とありますが、互という漢字が「入りかわる」と読むことの漢字の智慧に敬服してしまいます。

×
×
自分の身を他人の場においてみて、他人のことを考えてみることを、本当の「互いに」ということなのでしょう。そして、これこそ、本当の「交わり」なのだと言えます。

×
×
先にかかげた聖書の言葉を、もう一度くりかえし、声をだして読んでみましょう。

これらの言葉を、わたしたちは一見、「命令」のように、また「教訓」のように受け取ってしまっています。「あなた方は、互いに愛しあわなければ

なりませんぞ」「あなたがたは、互いに相手を尊敬しなければなりませんぞ」「あなたがたは、互いに救いあわねばなりませんぞ」と聞いてしまいます。

しかし、これらの聖書の言葉は「命令」でも「教訓」でもありません。ましてや、この言葉の言外に、「おまえたちは自分のこころの深いところで、憎しみをもち、愛などもってはいないだろう」などといった陰湿な脅迫じみた響きがある言葉として、受け取ってはいけません。さらに、「だから、おまえたちは、深く反省して、悔い改めて、神さまに救いをねがわねばならない」などというようなものだとするならばそれは、とてつもない思い過ぎしというものです。

これらの聖書の言葉を、「教訓」や「命令」や「脅迫じみた」言葉として、受け取る時、どうして自分に慰めや平安となりましょうか。ましてや、自分自身を清められるような思いで聞くことができましょうか。

はたして、これらの聖書の言葉は、どのような言葉なのでしょうか。

これらの聖書の言葉は、私達の「故郷（ふるさと）」の言葉なのです。「こころのふるさと」の言葉なのです。私達が、ついに帰って行くべき、「こころのふるさと」の世界を表した言葉なのです。

どの人も、自分の深い深いこころの世界、つまり利己的な自分を越えたところにある、素直で広々とした自分自身の世界

を知っているのです。そこでは、すべてが交わり、入れかわり、喜び、楽しみ、明るさが満ち光りかがやく命がたぎる世界なのです。それがこころのふるさとなのです。その世界から出てきて、その世界を表している言葉に人が出会おうとき、その響きは、どの人にも響きわたり、日常的な利己的な自分を越えて、より深い内なる自分にその響きは届くのです。そのとき、自分の内でまどろんでいた、魂が呼び覚まされ、無条件に共鳴しだすのです。

聖書の言葉は、「命令」でも「教訓」でもありません。人を「拘束」するものでもありません。それは「倫理や道徳」を説いているのではないということです。

聖書の言葉は、私達の内なる魂と霊に語りかける神さまの声であります。私達はその言葉のひびきによって、自分のこころのふるさと、自分の存在の根っこに目覚めさせられるのです。

旧約聖書の詩編の人は詩いました。

神の御言葉は、わたしの道の光り、わたしの歩みを照します。

わたしは神に望みをおき、わたしの魂は神の御言葉を待ち望みます。

そして、新約聖書のマルコ福音書は示しています。

御言葉を聞いて受け入れる人は、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶ。

みちしるべライト

いつも喜んでいなさい。

— 聖書 —

喜びと楽しみ

松下昌義

いつも何とも思わないで見過ごし、聞き流していることがたくさんあります。しかし、何かのきっかけでそのものにあらためて対峙するとき、今まで気づかなかったことが、そこに見えてきます。それは新しい発見であり、自分の世界を大きくし、人生を豊かにする有りがたきことであります。

「喜び」と「楽しみ」ということは私達にとって、とても関心が深いことです。ある意味では私達の人生は「喜び」と「楽しみ」とを求めて生きていることだとも言えます。でも、私たちは「喜び」とは何なのか、「楽しみ」とは何なのかということはあまり考えることなく、ただ漠然とそれらを求めているようです。そこで、これらのことを手にとって少し見つめてみたいとおもいます。

喜びということ、楽しみということを並べて見比べてみますと、その違いが少しは見えてくるように思います。「楽しみ」は感覚的な出来事であり「喜び」は精神的な事柄のように私にはおもえるのです。

楽しみは日常のいろいろな出来事においてもつことができず。例えば、食べること、飲むこと、聞くこと、見ること、触れること、運動すること、旅行すること、恋人と遊ぶこと、性的な満足を与えること、その他さまざまに興味を楽しむことなどがあります。

しかし、それらの楽しみは、ときとして、その場だけ、そのときだけのことで、「楽しかったねえ」と言うことで終わることが多いようです。つまり、それは私達の感覚的な次元での一過性のもので、きごとのように思えます。

それに対して、「喜び」ということは少し違いうようです。

喜びは一過性の楽しみではなく、言わば、楽しみが持つ内容とその意味とを知ることから生まれ、てくるのではないかと思えます。

例えば、感覚的な快楽としての楽しみを追い求めてそれを自分に得ても、必ずしも心が心からの喜びになるとは言えません。それどころか、快楽としての楽しみを体験しても、それがかえって自分の心の空しさを覚えるということだってあるのです。そして、楽しみだけに満足している人が、とても「馬鹿のように」見え見えてしまうことだってあります。「いったい、この人はなにを考え

ているのだろうか」と、その姿がとても愚かしく見えて来る事だっております。

「喜び」はどのようなときに自分の内に生まれてくるのでしょうか。それは、自分が生きて為すことに意味を見出したときに、自分の内に生まれてくるのです。

例えば、食べることは楽しみです。美味しいものを食べることは一層の楽しみです。しかし、それが即「喜び」にはなりません。それを自分の喜びとするためには、美味しいものを食べられたことにたいする有り難さを覚えるときに、美味しい物、または、食べることが出来た、そのことが、「喜び」として自分の内に生まれて来るのです。その意味で「喜び」とは感覚的な満足のことではなく、きわめて精神的な充実感なのであります。

喜びが精神的な充実感であるということは、それは、私達の人生における生きる意味を知ったということではないでしょうか。

ですから、私達が人生において出会う楽しみを、ただの感覚的な満足感でお終わらせるならば、その人は結局、人生の喜び、生きる喜びを知らないままで、単に自分の感覚的な満足を楽しんだだけということになります。それでは、本当に自分の人生を生きたとはいえないのではないでしょうか。

例えば、仕事が順調に進むことは楽しいことです。しかしそれを楽しむだけで、その仕事をするこの意味を自分に知

ることが出来なければ、その仕事は自分の人生における喜びにはなりません。

すべては順調に進んだ、お金もたくさん儲けた、物質的にも豊かになった、楽しいことも沢山出来る。しかしだからと言ってその人が本当に生きる喜びを自分の内に持つことができるわけではありません。

私達の生活に楽しみがいくらあっても、生きる喜びがなくては、その生活は空しいものとなります。たとえ、その生活が苦しくても、その人が生きる喜びをもっているとき、人は強く生きることが出来るのです。

歳がすすんで行くにつれて、人の楽しみは減っていきます。また、歳を取るにしたがって辛いことが多くなっていくものです。そして、はたして人生とは幸いなのだろうかと疑問すら覚えるようになります。それはほかならず、人生に於ける喜びが見出せなくなることなのです。

人生が楽しいか苦しいかということではなく、大切なことは、自分の人生に生きる喜びがあるかどうかということこそ最も大切なことなのです。

自分が生きていることに意味を見出す者だけが、生きることの喜びをもつことができ、本当の人生の勝利者、完成者となり得ます。「わたしがこれらのことを書くのは、私達の喜びが満ちあふれるためである」と聖書は語っています。

友よ、自分の人生に喜びを得よう。聖書の言葉に耳を向けよう。

みちしるべ

互いに信仰によって、励まし合いなさい。

—聖書—

不和を越える

—夫婦の不和について—

松 下 昌 義

「不和」とは字のとおり、「和でない」ということですが、「和」とは「やわらぎ」ということで、それは「穏やか」と言うことです。とするなら「不和」とは、「穏やかでない」ということとなります。

「穏やかでない」とは、波風が立って乱れ、苦痛があることで、それは「普通でない」ということになりましょう。このような「不和」は、一般的に、人と人との間のことがらに用いられていません。

「不和」のなかでも「夫婦の不和」ということは当人達にとって、事柄はとも深刻な問題となります。そこで、「夫婦の不和」について少し考えてみることにしましょう。

夫婦の不和ということとは、ある時を境として突然に起こることではありません。夫婦として二人が生活している間に、いつの間にかシクシクいかなくなって来るのです。

互いに、「この人はこんな人なのだ」と自分に

言い聞かせているのですが、決して納得はしておらず、どうしても気になり、ときとして、うとうとしくなり、いやになり、鼻につく存在になってきて、ついに生理的な嫌悪感を相手に感じるようになり、いつの間にか、「家庭内離婚」のような状態になってしまふのです。

「家庭内離婚」のようになってしまった夫婦の不和は、不和としての症状は重症状態だといえます。

夫婦に不和が生じてくるのに、何かはつきりとした原因があるわけではありません。その原因がハッキリしているならば、事柄はとも簡単でしょう。つまり、その原因を互いに正せばよいのですから。

しかし、夫婦の不和には、原因があるようである因がつかめず、とにかく「いやになってしまった」というようなものです。

ですから、「互いによく話し合って」直ぐに解決が付き、スッキリすることでもないようです。それどころか、よくよく話し合ってしまうと、かえって、互いの不和が表面化して、ことからは一層に深刻化して、結果は、話し合ってますますどうにもならなくなってしまう、ということにな

りかねません。

×

×

夫婦に不和が生ずるということは、どの夫婦にもおこることです。いつも一緒に生活をしている間柄まがらなのですから、互いに相手に不満を覚える事があるのは当然です。しかし、そのような中で、自分達を取り巻くところで起る出来事によって、気持ちがちがちに向けられ、不和が一時消えてなくなると言うことだってあります。子供が病氣や怪我をするとか夫婦にとって共に嫌なことが外部から起こって来るとか、いった事柄は、夫婦の間で持っている不和が消えてなくなりませんが、それは、一時的であって根本のところでは、不和は決して解消されていない、といったことがあります。

×

×

夫婦の問題を親しい友達に語り、互いに愚痴ぐちするようなことがあります。このようなことは、ひよっとすると、妻の側に立つ人におおいかも知れません。

もちろん、互いに自分のことを親しい友達に話すことは悪いことではありません。それで、一時的な安定を得ることもできますし、ときとして、不和について解決する智慧をえる場合だつてあるでしょう。しかし、たいていの場合、互いに相手の夫や妻が、こんなに嫌いやな存在なのだ、と言うことを告げ合うことになりかねません。そのような会話の内容が、具体的な話になってくればくるほど、その場は救いようの無い場となつてしまいます。もしそのようなことで「これです

きりした」と言うことで終わるならば、これほど愚かなことおろはないでしょう。結果は、ますます自分を惨めみづにするだけです。というのは、夫婦が互いに「表面的につくろつて」「なに食わぬ顔をして」かかわっているそれぞれになつて行くからです。このような夫婦を「偽善ぎぜん的夫婦」と言うならば、これは、夫婦として最も不幸な夫婦だといえるでしょう。

×

×

夫婦の不和は、いつでも生じてくるものです。若いから起らないというものではありません。若くても、中年でも、老年でも夫婦の不和は起ってきます。その意味で、夫婦の不和が起るのには、夫婦なれば誰にでも起る当たり前のことなのだと云えます。

大切なことは、夫婦にとって、不和が生じて来るといふことは、夫婦として互いに、決断して、自覚的に、相手を受け入れるべきときに来ているのだ、ということではないでしょうか。このことに気づくことは、なににも勝る智慧ちゑであります。

先に「聖書の言葉」(五九号)で共に考えましたように「互いに」ということに、自分の目を向けて見たいと思えます。互いに相手を決断して受け入れるために、気がついた夫婦のどとらかが、相手に自分を投げかけることを始めることは大切なことです。聖書は次のように示しています。

「互いに思うことを一つにし、高ぶつた思いをすてなさい」
「寛容を示し、愛をもって互いに忍び合いなさい」

みちしるべ

神はわたしたちの内に住ませた靈を
ねたむほどに愛しておられる。 — 聖書 —

すばらしい自分に気づく

松下昌義

あなたは聖書につきのように書かれてい
るのは意味がないと思うのですか。「神は
私達の内に住ませた靈を、ねたむほどに
深く愛しておられ、もっと豊かな恵みをく
ださる。」

— ヤコブ書四章五節以下 —

だれでも、今の自分に満足している者はいませ
ん。しかし、ある人たちは、今の自分に、自分で
あきらめて、今の自分でいるしか、しかたがない、
と思っっています。しかし、ある人たちは、今の自分
よりも、もっと善い自分になろうと願っています。

今の自分にあきらめている人の人生には向上も
進歩もありません。しかし、今の自分よりも、も
っと善い自分に成りたいと願っている人は、必ず
成長していきます。

今の自分にあきらめている人の思いは消極的で
ときとして暗くなります。「わたしは、所詮はこ
の程度の者なのだ」という自分自身をせまく小さ
な者だと決めつけ、そこに自分自身を自分の思い
でしばりつけてしまっています。

今の自分よりも、もっと善い自分になろうと願

っている人は、自分自身を光りに向かって解放し
ている人です。

×
わわたしたちは、自分について正しい見方をもた
なければなりません。自分が、もともと、どのよ
うな者なのかというのを正しく知っておくこと
と程大切なことはありません。

×
人間の幸福と不幸とは、自分自身が、もともと、
どのような者なのかということ、正しく知って
いるか否かによって決定されると言っても言い過
ぎではないでしょう。

×
先に紹介しました聖書の言葉をもう一度注意深
く読んでみましょう。

×
神は私達の内に住ませた靈を、妬むほど
に愛しておられる。

「靈」とは、本当の私、ということ。本当
の私とは、神さまに繋がっている私なのだとい
うことです。しかし、わたしたちは、そのような者
が自分であるなどと、ほとんど知っていません。
「私はわたしなのだ」と思いこんでいます。

×
旧約聖書の一番初めにあります創世記というと
ころに「神は土の塵で人を形づくり、その鼻に命
の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者とな
った」と記してあります。— 創世記二・六 —

この人間創造の物語の中心は、私達人間は、とてもはかない土くれにしかすぎない者でも、「神による命の息を吹き入れられている者」であるということです。命の「息」とは、「霊」ということなのです。つまり、私達はどの人も、神さまによる「命の息」を吹き入れられて生きる者となり、それぞれの人生を与えられている者なのだということです。

わたしとはなんと素晴らしい者なのでしょう。土くれの自分を見るだけでは、果敢ない者です。しかし、私達はただの土くれではありません。神による「命の息」つまり、神による「霊」を分け与えられている尊い者なのです。

このような自分自身であることを、使徒パウロは、キリストを通して目ざめさせられて次のように、喜びと感謝の声をあげています。

わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大なちからが神のものであって、私達から出たものでないことが明らかにするためです。(ですから)わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。

—コリントⅡ 四章七節以下—

自分という者がどのような者なのか、と言うことに気づくことが、聖書に於ける「信仰」ということであって、決して直接に「御利益」をいただくことを「信仰」という世間での、

それとは違うことも知っておきたいとおもいます。

自分自身がどのような者であるかと言うことを、正しく知ることは、自分の人生に対する態度と生き方をよくよく知ることになります。

神はあなたがたの内に住まわせた霊を妬むほどに深く愛されておられる。

私達は神に妬むほどに愛される「霊」的な存在なのです。にも関わらず、自分を暗く、狭く、小さな者であるかのようにあきらめて生きるということは、折角の神さまによる霊的な存在として人生を与えられた自分自身を、最も粗末にすることになるのです。

イエスさまは、次のように教えてくださいました。
あなたは世の光りである。あなた方の光りを、人々の前に輝かしなさい。

—マタイ福音書五章十三節以下—
人が、自分の本当の姿にめざめるとき、その人の人生に対する考え方と生き方が変わります。素晴らしい自分の発見に歓喜するでしょう。ですから、先の聖書の言葉は、「もっと恵みを豊かにくださる。」と言ったのです。

友よ、自分の内なる霊を見失ってはなりません。自分自身がどれほど尊く素晴らしい存在であるかに気づこう。神を仰ごう。それは本当の自分の発見となるでしょう。そこからのみ、あなたの霊が光り、新しい人生は始まるのです。

みちしるべライト

自分のことばかりでなく、他人のこと
も考えなさい。 — 聖書 —

神さまの定めに気づく

松下昌義

わたしたちが、自分に備えられた人生を幸いに生きて行くためには、人生の現実を正しく見ることが必要です。その見るべき現実の一つに「相補性」ということがあります。

「相補」とは、読んで字のごとく「補い合う」ということです。この世の物事はすべて、それぞれものが相互に補い合って成り立っており、それ一つで成り立っているものは何もないのであります。ですから、この世のすべてのものは相補性によって成り立っている。ということが出来ます。聖書はこのことについて、とても興味深く次のように語っています。

体は、ひとつの部分ではなく、多くの部分から成っています。足が「わたしは手ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょう。もし、体全体が目だったら何処で聞きますか。もし全体が耳だったら、どこでおいをかぎますか。そこで神は、御自分の望みのままに、体に一つ一つ部分をおかれたの

です。すべてが一つの部分に成ってしまったら、どこに体というものがあるでしょう。だから、おおくの部分があっても、一つの体なのです。目が手に向かっても「お前は要らない」とは言えず、また頭が足に向かっても「お前は要らない」とも言えません。それどころか、体のなかでほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。……神は見劣りする部分を一層引き立たせて、体を組み立てられました。それでからだに分裂が起らず、各部分が互いに配慮し合っています。一つの部分が苦しめば、すべての部分が苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。

— 第一コリント人への手紙

十二・十四以下

たしかに、わたしたちの体は、多くの部分から成り立っています。それはただ部分が集まっているというだけではなく、それぞれの部分が互いに補い合うことによって、部分全体が成り立ち、体としての働きをまっとうしているということです。このことを一口に言えば、私達の体は、各部分の働きの相補性によって成り立っている、ということなのです。

このような相補性ということは、どこにおいても見る事ができます。例えば、一本の樹にしても、水、空気、風、光り、土、その他いろいろなものとの関わりに於いて、初めてそれが樹と成ることが出来るのであり、その樹自身も葉や枝、幹、根、さらに花樹や果樹であるならその花、実などの部分すべての相補性において、「その樹」であることが出来るのです。決して、「その樹」がその樹だけで在るのではないし、また、在ることは出来ないのです。

このようにものごととはすべて、相補性によって成り立っているという現実には、私達の関わりにおいても同じであります。社会はただ人の集まりではありません。そこに居る一人一人の人間が、相互に自分の役割を為しとげることによって、自分も他人もそれぞれに快適な生活が出来る場が起って来るのです。その場のことを「社会」と言うわけです。

このように、樹にしても社会にしても、決してそれ自身が初めから在るのではなく、それぞれの部分の相補性においてそれ自身に成ることが出来るのです。そのように定めたのは人間ではありません。言わば、初めからそのような「現実」の定めが在ったのです。

ですから、初めから在った定めとしての「現実」は、神の定めとしか言えないのです。そのことを使徒パウロは先に紹介したように「神は御自分の望みのままに」そのよう

に現実を定められた、と記しました。

私達がこのような神さまの定めとしか言えない「相補性」に気づくなら、決して、何に向かっても、だれに対しても「お前は要らない」とは言えなくなり、「お前は要らない」と言うことは、自分に対して「死ね」ということと同じことなのだということを知るようになるのです。

物事の成り立ちの一番深い現実には「自分があって他人がある」のではなく「他人さまがいて自分が居れる」ということなのだと言うことを、人のだれもがよく知っておかなければならないとおもいます。この神さまが定められたものごとの成り立ちの一番深い現実に気づくことが、「愛」に目覚めることだと言えます。そのとき、初めてすべてのものが共に喜んで生きる「共生」ということが実現できるのであります。

わたしたちは、他人にそれを求める前に、それに気づいたとき、先ず自分自身その思いで物事を見、家族や友達との関わりに於いて、その思いを基本にして生きるようにこころがけたいものです。

すべての者が物が自分の為にあるのだといった誤った考えで生きている人間の集まりには、ただ争いと混乱と滅びとがあるだけです。

神さまがお定めになった「相補性」の現実を、しっかりと見据えて生活して行きたいといひます。

みちしるベライト

心をかたくなにはいけない。

—聖書—

自分のところを

善きことで満たす

松下昌義

「このころ」の持ちようによって、人はどのよう
にでも成ることが出来る、ということは本当だと
思います。

自分をとりまく人や物事にたいして、快く思っ
たり、怒りを持ったり、不愉快に感じたり、妬ま
しく思ったりするさまざまな自分を生み出して
るのは、私たちの「このころ」の動きであります。

自分の「このころ」が自分を作るのであって、決
して自分を取り巻く人や物事が、自分を作るの
ではないようです。

× × ×
昨日は、とても腹立たしく感じたことでも、今
日、自分のところが、とても嬉しいことで満たさ
れていますと、腹立たしく感じなくなってしまう
というようなことは、だれでも経験的に知ってい
ることです。

× × ×
それにしても、「このころ」って何なのでしょう
か。このころとは、ひろひろと動いているものであ
って、「このころ」という固まりが私たちの内に在
るわけではないようです。

私は、「このころ」とは、私たちの内にある「魂」
の働きの様子だと考えています。

「魂」の働きとは、考えること、感じること、
なにかをしようとか、しないでおこうなどと自分
をうごかす意志などのことですが、それらは、い
つも人や物事との関わりにおいて、いろいろな動
きをしているわけです。その働きのこのころと動
く様子が「このころ」なのだとおもっています。

× × ×
ですから、その働き方によって、私たちの気分
や気持ちが変わるわけです。

「このころ」の動きがいつも怒っている人がいま
す。また、他人の幸運や長所を見てうらやんだり
卑下したりして、その人が不幸になればよいなど
と思う嫉みごころが動いている人がいます。その
ような人は当然、それに相應しい生活態度が日々
あらわれてきます。そのような生き方はとても不
幸で悲しい生き方だとおもいます。しかし、一方
どんな人にも、どのような事柄に対しても優しく
このころを動かす、感謝することと喜ぶことを忘
れない生き方をしている人がいます。このような
人は、とても幸いな人です。

× × ×
とにかく、私たちは、自分のこのころの動かしよ
うで、自分をどのようにでも作り変えることが出
来るのです。

では、「こころ」を善いように動かすのはどのようなようにすればよいのでしょうか。

「こころ」の動きは、先にも言いましたように魂の働きによるのですから、自分の魂の働きを善くしなくてはなりません。魂の働きとは、考えること、感じることに、なにかをしよとかしなないでおこう、とかいう意志のはたらきであったことを、もういちど思い出しましょう。

この魂の働き自身が自分自身であり、その魂の動きとしての「こころ」の有り様が、その人の生きていく姿なのです。ですから、問題は「こころの」有り様ではなく、魂の働きこそ最も大切なことだといえます。

では、私たちは自分自身としての魂の働きをどのようにすればよいのでしょうか。

先ず、考える働きを、自分の得になることばかりに用いないことです。そして、感じる働きを自分が快く感じることはかりのために用いないことです。さらに、自分が得すること、こころ良く感じる事ばかりに、自分の意志を働かすだけに用いないことです。

これらを引っ括めて言いますと、自分中心、利己的に自分の魂を働かせないことだと言えます。

では、自分中心、利己的に自分の魂を働かせないようにするためにどうすればよいのでしょうか。

それは、自分の魂を善いことの方に向けることです。善い事の方とは神さまの方ということです。

神さまの方に魂を向けるといいますが、もうひとつはつきりしないと思いますので、誰でもわかる言い方をいたしますと、自分の胸に静かに手を重ねて、自分の一番深いところにある素直な思いに、謙虚に従おうとすることです。

私達の魂は、もともと善い方、つまり真実なる方に向かつて働きたいという願いを持っているものなのです。難しく言いますと、真理に向かう志向性を知性は持つており、美に向かう志向性を感情は持つており、善に向かう志向性を意志は持つているのです。そのような魂の願いが、素直になつて胸に手を重ねてみますと、自分の心にしずかに聞こえてくるのです。

それは何処から聞こえて来るかといえますと、私たちの内の最も深くにある「霊」が魂に突き上げてくるからです。

私たちの内にいます霊は神のご意志と繋がっています。魂が霊に向く時、人の「こころ」は自然に善くなつて行くのです。なぜなら、知性と情性とは愛、感謝、祈り、優しさ、喜び、平安、反省などの働きへと向かい、意志はその方に自分を向けようという思いになるからです。そのとき、私たちのこころは聖まるでしょう。

自分の魂を神に向けよう。そして、こころを善きことで満たしましょう。

あとがき

これは、月刊誌「みちしるべライト」の一部をまとめたものです。目次と表題を付して一冊にしてみました。すこしおもむきがかわり、読みやすく、且つ親しみやすいと、大方の人が言ってお下さり、感謝しています。

このような手作り文庫が、読んで下さる方の思いを、少しでも和ませるお手伝いが出来れば、有り難いことだとおもいます。

努力して一冊にまとめて下さった山本哲也氏に感謝いたします。

一九九三年十二月十日

松下昌義

みちしるべ文庫 7

『任せ合う幸い』

二〇〇二年五月十日 第四版発行

著者 松下昌義

発行所 左京キリスト教会

京都市左京区下鴨南茶ノ木町二九
電話(〇七五)七八一―九六四〇